

東洋学報 第五十四卷第三号 昭和四十六年十二月

論説

東女国と白蘭

—rlans 氏と sBran 氏—

山口 瑞 鳳

目 次

一' はじ め に	四' sBran 氏と Shan po sGo
二' Tsha kho ㄱ Shan rgyal sBra	五' sBran 氏の東女国
三' Kho hphan ㄱ IHa rigs sGo	六' sBran/Gyim po/gSer po ㄱ Suvarna
一、 は じ め に	

女国と東女国についての議論は既に数多い。問題点は、女国、東女国が何処にあつたかということ、女国と東女

東女国と白蘭 山口

国が同一か、別の二国かということ、別の二国ならば、夫々何処にあり、両者に關係があつたかどうかということ、更に、女国、東女国は吐蕃とどのような關係にあつたかということなどであろう。いずれを取り上げても、まだ決着を見たといえるものはない。チベット学者の間からも解決への努力は重ねられてきたが、必ずしも刮目に値する結果が呈出されたとはいえない。

筆者は、先頃「白蘭と Sun pa の Hlans 氏」と題する一文で、Hlans 氏の居住地を探ることを試みた。その際、Tsha ba ron (Gyal mo ron) の Hlans 氏については概略を伝えるに留め、考証すべきことがらも今回のために保留した。というのは、彼等が有名な東女国と深いかわりをもつていると考えたからである。

東女国を構成した部族は、元来 Tsha ba ron にいたわけではなく、実は Khams stod 方面から移住してきたものであり、その移動は、吐蕃王朝が權威を確立する過程でとつた政策の結果、惹きおこされたものと見做しうるのである。

東女国は、実は、その地が今なお Gyal mo ron 「女王谷」と呼ばれるように、近代まで母権的社會の姿をとめて存続した様子である。その特殊な性格のため、彼等に関する固有の伝承も、彼等と婚姻關係を結んだ Hlans 氏の所伝中に、父系のそれとは別に、僅かながら跡をとどめることができた。ここに我々が事實をたぐる一つの手がかりを見つけるのである。

先ず、東女国の所在をこの一文で確かめ、その上で、他日、Khams stod から移住した東女国の祖先が、吐蕃王朝とどのような關係にあつたかということを探り、Khams stod に定著する以前の彼等の故地を求め、そこから更

に「女国」を見ようと期待するのが筆者の願ひである。

## 二、Tsha kho 及 Shan rgyal sBra

rLans Po ti bse ru とは Sum pa の rLans 氏が拠つた Tsha<sub>1</sub>ba roh についで触れるところが殆んどなご。ただ一箇所、一族の聖者の一人が Sum pa Tsha ba klun sgan rin mo に来た折、Roh chen Kha ba dkar po を訪れた旨をしるしてゐるの(1)が、Tsha ba klun sgan rin mo は、恐らく今日の九子屯の龍窩をさうのであらう。これは九子山、玉山、筆架山の名でも呼ばれ、雑谷斤の西四里の地にある(2)。Roh chen Kha ba dkar po は Tsha ba roh 第一の山、大雪山で、俊磨 So mah の東側にあり、So mah chu の源となつてゐるようである(3)。

雑谷は、後に見るよう(4)、「Tsha ba roh の Kho」とさうのを要約した呼称、Tsha kho の対音で、元來、部族名を示していらしい。この地方は、Liu En-lan 氏によると、戈 Ko と呼ばれる Gia-rung 人が支配し、東部の山嶽地帯は Ch'iang によつて占められるさう(5)。Gia-rung の名は一般に rGyal mo tsha ba roh の略称として用いられる。二つ(6)の地帯から成り、今日の雑谷を中心とする Tsha ba roh と、俊磨以西の rGyal mo roh とを併せてさうのである(7)。

雑谷は hPhan の国(潘州)に拠つた rLans 氏(8)が手中に収め、東部の Ch'iang と西南部の金川方面(東女国)を共に制覇する拠点になつたところであらう。rLans 氏はまずこの地で Kho と称する部族を制圧吸収し、他方、Ch'iang に代表される部族も統合、ついで、金川に拠つた部族も同化し複合した。ただ、Ch'iang は制覇されな

からも同化せず、Khoや、金川方面に拠つた部族が rLans 氏に同化されたのとは様子が異つていたようである。<sup>(9)</sup>

雑谷地方は、いずれも rLans 氏が拠る Gyim god 金川と gSer po 潘州(又は黃勝<sup>(10)</sup>)との中間の地に当り、かつて白蘭や白狗が拠つていたとされる恭州、維州の地と重なる点でも重要である。「寺院総攬補」には、混乱はあるが、興味深い基本的な記述があるので、これを引用し、註解する形で話を進めていきたい。

Tsha chu 河沿いに、仏教の外嵬をなしながら gSum (pa) の Tsha ba の国と喧伝される王国がある。これに関して色々の伝承があるけれども、(まず) rGyal (mo) ron の王国はどれでも、その氏族が sBra であると説明されている。その部族は Tsha kho というものがあり、自分達の言葉で自ら呼んで Lan gsi と呼んでいる。話は別になるが、Bod の部族には bSe, rMu, lDon, sTon 四族があり、(この地にあつた)有力な部族として初期には Shan po、後期には lHa rigs sGo が挙げられる。(中略)伝説によれば、mi bu 六族は Shan po sGo を加えて七族とされる。これらのもう一つは bSe と sBra は同一と説明されるが、昔の王統記に bSe Khyun hBras と記してあるのと軌を一にするものと思われる。「かの gSum の hgag dog mo<sup>(11)</sup> は sBra の手に帰した。sBra の勢力が強大であつたその為である。」と記されているように、mDo khams の四大理のうちの gSum の rGyal (mo) ron の hgag dogs (mo) は sBra が手に入れたのである。

以上のようにあるが、この bSe gSum とあるのは、元来『三』とどうような意味があつたのかも知れないが、数詞でなく、くわゆる“Sum yul”の Sum を示すものがある。<sup>(12)</sup> Tsha chu は今日の Tsha kho 雑谷方面から流れ出て、So man 後磨河に合流し、rNa chu, sMar chu と rdzin hgag (=mDzon hga) 松岡 Dam pa 党堪附近

より更に合流して rGyal ron chu chen 大金川河を構成する。 Tsha chu 谷津と Tsha ba を中核とする gSum の王国とせ、 rGyal mo tsha ba ron の中に rGyal ron と他ならぬ<sup>(97)</sup>。

この rGyal mo ron を構成する部族が sBra 氏と、その中に Tsha kho とついで一類があることについては、<sup>(98)</sup> sBra 氏に関する議論は後述の通り、 Tsha kho の説明を見れば、 Tsha kho の人々は自らを Lan gcsi と呼んでゐたことである。 Lan gcsi の gcsi は<sup>(97)</sup> Na gcsi とはう場合の例も併せてみると、父系の氏を示すらしく漢語『氏』とも関連があるのかも知れない。勿論、Lan は rLans の異態字である。あとに続く引用文で説明されているように、 Tsha (ba) ron の王は Kho hphan と呼称なほなるものでもあったこと、 Tsha kho とついで名称が成立したところ、この中に Tsha kho とついで Tsha (ba) ron の Kho とついで意味があらひ、 Kho は氏族名と、 Kho hphan の略称なりともである。 Kho hphan とせ、 hPhan po の Kho とついで意味があらひ、 Kho は氏族名と、 Kho hphan gogs rLans, hPhan gogs rLans の意と、<sup>(98)</sup> 潘州を根拠地とする rLans 氏のことである。 Kho は夷または獐獐夷と中国資料で呼ばれるものでもあるが、これと rLans 氏との関係は後に詳しく見よう。

引用文に「rGyal (mo) ron の王国は、どれもその氏族が sBra であると説明されてゐる。」とした後、「この部族は Tsha kho とついでのがあり」と続けるが、これらの部分については説明を要する。つまり、 rGyal (mo) ron の王国を構成する sBra と Tsha ba ron の Kho 乃至 rLans との関係が問題となるわけである。文字通りとれば、 Tsha kho は sBra 氏一族に内属するところとなる。他方、これらの名称の用法一般からみれば、 Kho の rLans

も、sBraとは独立の氏族名である。sBraが rLans または Kho を征服したためにおきた内属ではなく、後程見られるように、実は、母権継承制の sBra 氏が彼等と婚姻関係を結んだために、rLans または Kho 氏とついで、母方について見れば、sBra 氏の一族内にあることを出ないという意味になるのである。

Bod の四大家族とは別に、この地で有力だったものとして、初期には Shan po、後期には lHa rigs sGo があげられるとするが、これらは sBra や rLans または Kho とはどう関係するのだろうか。引用文の続々とついでに次のようである。<sup>(23)</sup>

この国で、昔 mDo bsher nag po が在った頃、Vairocana がお見えになった。その弟子の gYu sgra shi'i po も Tsha kho であつた。縮めて称するため、mDo bsher nag po の一族には rGyal nag の家系、Shan shun sBra の王に対つては Shan rgyal の系統（と夫々名をいひる）。Tsha roi 王は Kho iphan と呼ばれ、ものであつたため、これを（まどめつ）Tsha kho とつうようになつた。これらが gSum 王国の先祖である。

rGyal mo tsha ba roi に君臨した王家の系統と名称を述べたものである。このうち、rGyal nag の系統は Khri sron lde btsan 代であつたことが知られてゐる。<sup>(26)</sup> 右に見えるように、sBra と Tsha kho は、一応別の系統に属してゐるので、その間柄は特殊な内属関係でしか解釈をせねないのである。Shan rgyal には「shan po の王」を縮めたもので、Shan shun 系の sBra が、後に見るように、吐蕃王家の母系氏族 shan po であつたのを固有名詞化して称としたものである。<sup>(27)</sup> 従つて、rGyal (mo) roi の有力者として「初期では Shan po」という場合の Shan po は Shan rgyal をつうのであり、sBra 氏は他ならぬ。

「後期では IHa rigs sGo が著せられた。」と云うのは、IHa rigs sGo が、後代では sBra 氏に代る勢力となり、たとえうのひである。IHa rigs なる rLans 氏の異称であるから、rLans 氏に内属する sGo が登場したのである。ところが、この sGo は、母方として Shan po (sBra) しか次第に迎えないようになり、sGo とはいえ、sGo を父系にもつたものの Shan po と云う実態 (Shan po sGo) が生じ、「mi bu 大族は、Shan po sGo を加わって七族とせられた。」と云う表現はこの地方の氏族分布の事情が要約せられたのである。この sGo が Kho と同一であり、また、Shan po sGo とは、既に述べた sBra の内属たる Tsha kho を指して云ふものとす。とすれば、Shan po なる IHa rigs sGo の交替は、Shan rgyal なる Tsha kho くの交替とも云ふべきである。とすれば、sBra 氏に代る、sBra 氏に代る Kho の中に母系氏族として入りこんだ sBra 氏に代り、後代も殆んど支配され続けたことにならぬ。rGyal mo ron の氏族が、すべて sBra であるところから、実は、rGyal mo ron 及び Tsha kho の關係は、この二種なるかと云うことも含めて、以下に「し」を考察して置かたう。

最初の引用文は、sSe khyun hBras を引かぬと、田中<sup>(88)</sup> sSe と sBra とは同一たとして居るが、この論ずる sBra は、後述の「し」に sBran の崩れたもの<sup>(89)</sup> hBras とは直接關係がない。したがって、ここでは論じないこととする。

## 三' Kho hphan ~ IHa rigs sGo

Tsha kho 𑖅𑖇𑖆 Tsha ba ron 𑖅𑖇𑖆 Kho hphan 𑖅𑖇𑖆 hPhan po rLans 𑖅𑖇𑖆 内属するところのいであるが、この關係の成立過程を追つて見よう。

Kho が rLans に支配されたことは、rLans po ti bse ru の中でも跡を辿ることが出来る。rLans 氏が古代から國わらをもつた部族を mched dgu (九族) とし、stod dkar, bar khra, smad nag の修飾語のものと図式化して示し、その最後のものを smad kyri nag po mched dgu とし、<sup>(82)</sup>

dPal dan bTun dan Ko dan gsum/

Bra thui Nag le dGu zin drug/

Kho yo Kho spro Kho ara dgu/

と挙げる。原文は写本で誤りが多く、到底細かい詮索には耐えないものである。先ず、Kho yo, Kho spro, Kho ara が、smad つまり mDo smad 地区の仲間にくわえられた各種の部族であるという。第一行の Ko は、恐らく Kho と同じで、第三行目は、九という数の調整上<sup>(83)</sup>、一行目に述べられた Ko を細説したものである。それ故、上記の引用には、更に、説明として、<sup>(84)</sup>

Kho yo には、十二の万人群あり

Kho spro には、十八の万人群あり



とそえているが、既に Kho ara を欠いている。十二、十八の数も、象徴的図式的なもので、具体的なものではなく、Hans 氏が保持した勢力を誇示したまでである。Kho に加わえられた yo, spro の意味は明確には云えないが、Ara の用い方から見て、Kho の所属別を示すものとしてよいであろう。

Kho の Hans への帰属はいつ頃からあつたのだろうか。元和郡県図志卷三十二には

隋開皇六年以<sub>レ</sub>近<sub>ニ</sub>白狗生羌<sub>一</sub>於<sub>ニ</sub>金川鎮<sub>一</sub>置<sub>ニ</sub>金川県<sub>一</sub>。(茂州通化県の条)

武徳七年白狗羌首領内附、於<sub>ニ</sub>姜維城<sub>一</sub>置<sub>ニ</sub>維州<sub>一</sub>、以<sub>レ</sub>統<sub>ニ</sub>之<sub>一</sub>。(維州の項)

とあり、通鑑の唐紀六、武徳六年十二月の条には、

白簡白狗羌竝遣使入貢……以<sub>ニ</sub>白狗羌地<sub>一</sub>置<sub>ニ</sub>維恭二州<sub>一</sub>。

とあり、白蘭、白狗を並べて言及している。勿論、白簡は白蘭の誤りである。白狗の白は白馬、白蘭などに冠した白と同じく、「白」に対する部族の特徴を示す称である。<sup>(36)</sup>従つて、白狗とは「白い」狗氏の謂である。狗は現代音で *kou*、古典音で *kau*、古音で *ku* である<sup>(37)</sup>という。ためらうことなく、今問題にしている Kho の対音とすることが出来よう。また、その地域名と結びつけて Tsha kho と呼ぶことも許されるであろう。

「白い」と殊更に称するのは、四川通志卷六、輿地沿革、雜谷庁の条に

唐武徳七年、白苟羌<sup>(38)</sup>鄧賢佐内附、乃于<sub>ニ</sub>姜維故城<sub>一</sub>置<sub>ニ</sub>維州<sub>一</sub>。

とあるように、その姓が鄧であつたからに違いない。鄧は、古典音、古音が *ang*、<sup>(39)</sup> IDoh の対音を示している。IDoh は四大部族の一つであつて、Sun pa 系統の部族の特徴を示す「白」とは元来関係がない。とすれば、

この「白い狗」とは、Sum pa に従属した方の Doa を、特に区別した称だつたと考えるべきである。彼等は元来 Doa の一部に過ぎなかつたから、果して、その勢力も大きいものではなかつた。<sup>(41)</sup>新唐書には、

白狗与三東会州二接、勝兵纔千人。

と説明が入つてゐるが、この事実を示している。いずれにせよ、隋代初期には Kho が Sum pa の rLans 氏つまり、白蘭に従属して、彼等と行動を共にした為に「白」を冠して彼等と並び称せられていたのである。

Tsha ba roh の王とつて言及される Kho hphan の場合は、一般の Tsha kho の称と異り、Kho が更に hphan po の rLans 氏と婚姻関係を結ぶことによつて rLans 氏のうらの一支となつた事実の上に立つ呼称なのである。このような命名と事実関係とによつて rLans po ti bse ru は説明して<sup>(42)</sup>

(一人の人に) rLans と IHa gzigs を併せて云う呼び方があるが、(それは) dGra 氏の家筋(の子)に名をつけた場合である。(この人は) dGra の御子息である rLans 氏なのである。rLans の御子息と(dGra を呼ぶ称を用つて) IHa gzigs とも呼び名をつけたりする。また、gSer, gYu, Ru dpon, Grags mgo ba など細かい氏にも命名の必要がまことに多いため、(母の)氏名を名字としても不都合なことにはならない。

とつて。Kho hphan の Kho も、母方の氏名を新たに名字として、父方の氏名または通称と併せて挙げたものであることが理解される。引用文では、IHa gzigs rLans とつて呼称をとりあげ、IHa gzigs ʔ dGra (dBra /sBra/sBran)<sup>(43)</sup> 氏固有の呼称であつたのだが、dGra 氏を母とする子の名字として新たに用いられたと例示してゐるのである。これは、後に見るような東女国の母権継承制の伝統がもたらした命名法に由来するものであるのかも<sup>(44)</sup>

しれない。引用文が Brand 氏を例としているのは、おそらくその為であろう。

近代の Kio<sup>(46)</sup> をすべて Hans 氏に内属するものとして把えるとき、近代の中国資料の記録内容がよりよく理解できるようになる。「松潘県志」に収載されている「恢復松潘四条」なる文書には、松潘鎮管轄の諸部族に關して言語的特徴から四種を區別し、<sup>(46)</sup> その一つに獐獐子系<sup>(47)</sup> というのを数えている。これは、他に獐獐種、獐夷というものと同じである。文書は次のようにいう。(括弧内は筆者がくわえたもの)

松中属七布徐之河 (七布八寨) 接連疊溪、平番属小姓、大小耳別、六関、松坪接維州属五屯、四土等処一類之語係「獐獐子一種」。

右によれば、岷江西岸の小姓(溝)と六関、七布徐子河と五屯、四土が獐獐子の抛る所である。<sup>(48)</sup> 「松潘県志」や「四川通志」で獐獐種または獐夷種とするものには、七布徐子河の北西寄りにある峩弥喜(峩眉喜)、その北側にある麦雜蛇灣、毛革阿<sup>(49)</sup> 按も加わっている。毛革は「恢復松潘四条」で吐蕃種に分類されるが、ここでは獐獐子の北端に位置を占めているから、兩種の境界線上にあつたのだろう。いずれも、五屯、四土の北に迫る一衣帯水の地である。この他に、岷江を越えて東側にある平番管属の岷竹寺の地を「四川通志」は獐夷種に数えている。この地だけが他の領域に喰い込んでいることにあらかじめ注意を払つて置きたい。

以上の土司名を並べて見ると、<sup>(50)</sup>

岷竹寺 — 安栄

毛革安寨 — 立窩亞 (…裔率浪)

東女国と白蘭 山口

七布(徐之河)

郎。卡革勒(琅。卡格)

峩眉蛇灣

索朗。(索。郎)

俊磨(女土司)

郎。柱借(琅。柱)

卓克基<sup>(51)</sup>

索浪。卓瑪

松岡(女土司)

索朗。郎。木耳吉

党壩

索朗。谷色爾滿

——更噶斯丹增姜初

となる。氏名は、知られる限りでは、郎(琅) Plans と、索浪の誤記と思われる率浪も含めて、索朗、索浪、または索朗 Brah と谷 Kho<sup>(52)</sup> によつて占められている。このうちの郎を含まず、索朗等とのみ示されるものも、後に見る「寺院総攬補」で sBra と言及されているものと同じ<sup>(53)</sup> であり、既に見た Po ti hse ru で dGtra と誤写されていたもの<sup>(54)</sup> 当るから、Plans 氏に内属するものとして、Plans 氏の価値であえて読みとつてもよい。とすれば、すべてが Plans 氏である。しかし、Plans 氏の方は、すべてが必ずしも(獐) 獐種ではなく、これに属さないものが、北部の潘州に近い作略、下作爾革、物蔵、下包坐、谷爾壩、雙則、熱霧等の土司名として同じ資料に見えている。このことから、この地方の(獐) 獐種としての郎氏を、hPhan po Plans に内属する Kho' u ma' u Kho hphan により致するものと判断し、Kho と(獐) 獐とが同じものを表記していると考えたい。チベット資料の伝える Tsha kho<sup>(55)</sup> の範圍と獐獐子の言語領域とが全く一致することでも、この判断は支持されるであらう。

Liu 氏は、この地方の Chiang の一伝承を、紹介して

Once, when the Chiangs were driven out from their home, they were all dispersed, and migrated away in small groups. The groups which came to Li-fan (麗番) was confronted by a strange people called the Ko 𠵼 people, who were not civilized, but very strong, The Chiang people were afraid of them, and thought to run away. But God showed their leader in a dream the secret of fighting their enemies, the Ko people. The method was very easy, simply to fight the enemy with sticks and then by throwing *white stones* after them, They did accordingly, and the enemy was conquered. The Chiang people then settled down to live happily, and sang songs of victory.

と示している。これを譯むと、「𠵼」を畏敬するや、Ko をあつて、ただよつた白狗羌の後裔である Tsha kho とつて Chiang 人達の西側、五屯・四土に住む Gia-rugn 人の祖であると断定することが出来る。国を逐われて、この地に居つた Chiang の人々とは、Tsan 方面から移動してきた Sehu (rGod) 細封の一族を指す。一度は、Lians 氏に服属する身分にもなつたが、近代では、五屯・四土の東南寄りの地に独立し、土司として蘇氏の名を見せている。

Kho を母方とした Lians 氏の出現は、以下に見るように、白狗羌の時代からかなり下つた頃になる様子である。彼等は、前期の Shan po を代つて rGyal mo ron を支配するが、その母方を迎えた Shan po が、やがて再び実権を手にするのである。

白狗羌が都を名乗つていたことは、既に見たところであるが、「寺院総攬」には

Tog tsha, Mog tsha, mGo tsha, sPu tsha, rKañ tsha など十八 tsha と聞えられ、Doñ である。とせし mGo tsha を Doñ の流れのやがて数えつゝる。rU びつゝ tsha せ、dGe shi rsta, Shañ tsha などとせし、中国資料で咄と写されるものと同じか、チベット語の母方の血縁を示してつゝ tsha と同じか、いずれともわからな<sup>(82)</sup>。この mGo tsha は、同じく Doñ に属する Be ri や Rog cus (gul) と共に、玉樹方面に住牧してつたとされる Gohu tsha と同じものひきまゐるのだらう。

mGo tsha の mGo のみを取り出し、sGo と並べて、一方を他方の異態字と見なすとせ、次に、sGo Idon の名が呼び上るのが順序であらう。この方は、Idon 部族の sGo 氏という意味で、そのゆかりの地に名づけたものと思われる。これは、*kyu* 白狗の「狗」(kau) が、*da* 鄧 (*da'ang*) に属していたのと同じ事実に基づいた命名なのである。とすれば、「狗」は、正しくは sGo/mGo/rGo の対音を示したもので、Kho は訛つて現れたものになる。また、「文」で表わされるものも「狗」に準じて考えてみよ。従つて、獐裸種という場合の「獐」「文」も、多分、冠字または前接字の一異態「文」を写したものとされねばならないであらう。

「後期には IHa rigs sGo」<sup>(82)</sup>が、rGyal mo roñ の有力者となつたとつゝ表現は、Kho を母方とした rLans 氏、*kyu* Kho hphan が、Tsha ba roñ の王となつたこととをほぼ同等とつゝ、IHa rigs の rLans 氏の *kyu* rGo/sGo/mGo/hGo を母方とした *kyu* Po ti bse ru の *kyu* tsa tsa せ、*kyu* Bryan chub hñe bkol の *kyu* 弟が二人あつて、上を rGo la rgo god (sGo la sgo go) とつゝ、sGo rse の祖 *kyu* tsa tsa せを見る *kyu* とが出来た。また、*kyu* tsa tsa せ *kyu* rGyal mo roñ の *kyu* mGo tsha とつゝ *kyu* tsa tsa せ *kyu* mGo

IHa rigs sGo 伊合里經

Main po rje sgro kha—sTag po che dar dpal le—mTsho bzai lha gzigs—Byan chub hdre bkol—※

—rGo la rgo god……sGo rse

—sKal bzai lha ston  
—dPal bzai lha mkhar

—sKyid gsum dgah—Yan la yan bzai—dPal bzai khri legs

—Bum thog

—dPal bzai a yogis  
—dPal gsum a mchod……rLais btsan snan mgo la  
—mGo tsha

※—Che bzai dpal sen

—gÑan thog a khrom—gÑan po ña mgo khri—rLais ston Bya shu nag po (=Sen ge grags)—※

—mTshe ma

—sTag tshab nor ba

※※—A dge—rDo rje hod

—A sai—A gser—gYu chen rGyal ba skyabs—

—rje spyan sha Rim chen (1175—1255)

—Ces rab rgyal mtshan—rGyal ba rin po che (1203—1267)

—Sangs rgyas skyabs—Rin po che bcu gñis pa (1218—1280)

—blon po dge slon

を母にもつ子の意味と解せるから、Bryan chub hdre bkol の祖父と同時代に、sGo が母方として迎えられていたことがわかる。rje spyan sha Rin chen grags pa hbyun gnas の生誕が西曆一七五五年<sup>(67)</sup>であるのを基準にして、一代を二十五年乃至三十年として逆算すると、Bryan chub hdre bkol の生誕は、九六五年から一〇〇〇年の間に落ちる。その活動の時期は、後期仏教流布期 (phyi dar) の冒頭と重なり、彼の活躍を伝える Po ti bse ru の記述<sup>(68)</sup>と矛盾しない。

rGo la/mGo la とついでに、rGo/sGo/mGo の王の意であるが、Bryan chub hdre bkol の曾祖父の第二人の系統で名乗られており、その一方は、sGor rtsé の祖とされている。sGor rtsé (sGo rtsé) は、sGo rje と同義<sup>(69)</sup>で、sGo の統領を云う。IHa rigs sGo とついでに、これらの一党を指すものとしてよいであろう。

rLans 氏でも、これらは rGod ldin btsan の系統<sup>(71)</sup>であり、潘州や金川方面を統治した sSer pa や Ru dpon の系統<sup>(72)</sup>と別であったため、mDo smad gYar mo than の主流としての後者とは区別され、特に、IHa rigs sGo とか Kho lphan の名で呼ばれるに至ったのであろう。

松潘県志の附図によると、sGo rtsé に縁のありそうな名称として華子嶺が、岷江にそそぐ岬竹の河の源に見える。『恢復松潘四条』には、果子壩 (sGo rtsé pa) の名が、氏羌系の言語圏に含まれるものとして示される<sup>(73)</sup>。竜安属<sup>(74)</sup>とあるから、華子嶺より東寄りになるのであろう。岬子寺の土司は、先に見たように、獐夷種であり、この地は、岷江本流の東岸に突出した形で獐獐子言語圏の岬になっている。後述のように、rGyal mo tsha ba roh の西側は、獐獐種とはいえず、sBran 氏による女国的色彩が濃く、東側が、逆に父系制的な獐獐種の伝統を保っていた



と際立つた対照をなしている。両者は生活様式さえも異なしているところ(85)、これらのことな、IHa rigs sGo<sup>(86)</sup>つまり、Tsha kho が、東側の sGo rtse を基盤として rGyal mo tsha ba ron に発展した跡を示すと見えるのではないだろうか。

rLans po ti bse ru とは、Tsha kho に関する記述は殆んどなく。sGo rtse が、Bryan chub hdre bkol から四代遡つた、彼等とを共通の祖から出ているのだ、僅かに「sGo la sgo go は sGo rtse の祖」と指摘するに止つてゐる。おそろへ、Bryan chub hdre bkol の系統を前に押し出すため、より近い傍系に関する記述を却つて省略して記述したのであるらう。Po ti bse ru でも、「寺院総攬補」でも、Kho と sGo は、別個に現れ、両者の関係は確認されないまままで終つてゐる。前者でも、Kho を古い時代の配と記述し、sGo を割に近い昔の母系氏族として示す。後者では、Kho hphan を単なる王名として扱い、既に、IHa rigs sGo と同じ位置に並べて見る必要を全く意識していない。両書とも、古い時代の Kho を rLans に内属する sGo と改めて重ね合わせようとするまでにはよく記憶してはなかつたのである。ただ、清代の資料で、松岡の女土司の氏名を「素朗谷」と示していたのは、珍らしい例外である。「谷」が写すものは普通、雑谷 Tsha kho の Kho である筈なのに、ここでの「谷」は、明らかに氏の名を写しており、それには sBran sGo の sGo 以外は対音として全く考えられないからである。

#### 四' sBran 氏と Shan po sGo

先に見たところでは、rLans 氏には、母の氏族名を用いて、子の名字に充てる習慣があつた。その場合、二氏

名を兼挙して *Iha gziags rIans* とか、*Kho hphan* などとするものもあつた。しかし、*rIans* や *hPhan* (*po*) の称をくわえなくとも、特定の地域では、母方の氏名だけによつて *rIans* 氏内属の名字であることが充分認識されたであらう。<sup>(77)</sup> 先に挙げた、中国資料の示す土司名の場合、特に *Gyal mo ron* の四土に限つて、索朗・郎(卓克基)、索郎・谷(松岡)というように二つの氏名を重ねて示す例が見られる。他の、獐獠種と目される土司に限つて見ても、氏名としては *rIans* 郎、琅<sup>(78)</sup>のみが挙げられているから、右の二例は特殊な場合を示すものと解されてよいであらう。卓克基は、チベット資料によつてのみ女土司<sup>(79)</sup>であると知られるが、松岡の方は、引用文に見る通り、既に女土司と記載されている。二例の場合、いずれも母方の氏名(索朗)を一般に称していたが、他の場合に準じて、父方の郎、谷の氏名も併せて挙げたものに相違ない。二例と並ぶ俊磨について見れば、この点は明らかで、ここでは女土司と示し、名は索浪とのみ挙げている。索浪は、索朗の異つた写し方か、或いは、中に挟まれていた朗を誤つて省いたものかも知れない。いずれにせよ、女土司三例に共通な氏名「索朗(浪)」をここに確かめえたわけである。これはチベット資料で *sBra* とあつたものの対音である。より正しくは *sBrah* とすべきであるが、その事は次に見るであらう。 *sBrah* ならば、「字朗(浪)」、或いは「索字朗」と写してあつたのが本来かも知れない。

「寺院総攬補」<sup>(81)</sup>には、俊磨についていう。

*gSum* 王国の筆頭である *So man* の *Nor buhi giñ* は、王系連綿として続いてきたが、ある時、王子が三人生れ、政治上の意見が合わず、(争つた結果)他の系統を従えたそのうちの一人 (*rus stogs cig*) (の国に)

sBran<sup>(88)</sup> (「従える」) 王国の称がついた。

右の名称起源の話は、よくある通俗語源考の一つであるが、sBran という本来の綴りを示しているところに価値がある。女士司の国であるのに男子による相続を述べているが、続くところでは、

sKra dkar sgröl ma (「白髪ターラ」)と、いわれた女王 sGrol ma tsho のとき、シナと促浸(大金川)とが争つた。その際、配下が戦にくわわるのを牽制したので、(清)帝から前代未聞のお言葉と官職とを頂いた。

(中略)その後を女王 bSod nams sgröl ma が統治した。この二代の間に勢威が拡大して dBal gul, Khro kho, mGo log まで支配した。

とあつて、清朝資料でも確かめられる史実を一部記載している。それらによれば、梭(後)磨女士司卓爾瑪(索浪卓瑪<sup>(85)</sup>)が、右の sGrol ma tsho に当たる。この二代は、継承関係について見る限り、無作為に抽出されたものも同然だから、「共に女王である<sup>(86)</sup>」ということだ。「歴代女王である」ということが示されていると見てよい。この後に続く引用文中でも、So man 王家における父子の相続に言及するところもあるが、聊かも、歴代が女王であったことと抵触する特異な事件としては扱われていない。一方では確かに男子による家系の相続が行われていながら、他方では、これもまた確かに、女王または女士司による母権の継承が、別の筋を追つて同時に行われていたのである。しかも、両者の体系は、決して矛盾しない関係にあつたに違いない。例えば、母から娘へと母権が継承されることは、男子による家系の相続と矛盾するため、ここでは考えられないわけである。母権は、女士司に共通な氏名「索朗(浪)」(sBran)と共に受け継がれていたのであろう。とすれば、この事実もまた、継承体系の輪廓を限

するための重要な条件の一つとなるものである。今、これらの諸条件に従つて推定すれば、問題の母権は、sBran氏出身の母から sBran 氏出身の嫁に継承されたのだとせざるを得ない。このことは追つて確かめられるであらう。先の引用文の直前に<sup>(87)</sup>

(So man 王家は、) Rab brian の系統より分れたとも云われ、また、チベット法王(吐蕃王家)の流れをくむものともされるが、はじめて So man 王国に(王として)臨んだのは、Tshe mgon legs pa 王で、以来代多く経たとき、sTsa ban thar 王に三人の王子が生れ、夫々に分れたともいわれる。

と示される。この三人と、先に見た三人との異同は不明であるが、父子による家系の相続があつたことは確かである。<sup>(88)</sup>

冒頭に、So man 王家の祖が Rab brian にいた sBran 氏の後裔であるといふことと、吐蕃王家とのつながりをもつものであるといふ二つの伝承に言及しているのは貴重である。

更に、sBran 氏に属する Khu hjo という家族について「寺院総攬補」<sup>(89)</sup>は解説して

(彼を) Khu hjo の一族であると主張するが、(Khu hjo は) sBra (=sBran) と同じものである。昔、Kham 方面にいた sBra の殿様一族のなごしのうちから(あるものは) rDo rol khan drug や lHa sgo sten などに(移り住んで)いたのだが、Klu bsher nag po が長をつとめていた時、大飢饉が生じ、Klu bsher 父子は、Tsha (ba) ron に至じた。(やむを得ず) Tsha rgyal に服属したので、Klu bsher は大臣に任命された。大臣 sBra rgan と名をけられたのが訛つて Rva rgan といわれてゐる。

と云つてゐる。rDo rol ʒa mGo log の地であり、<sup>(97)</sup>「四川通志」や「松潘県志」の記載によつても、中郭羅克の土司名は、素浪丹孛となつてゐる。<sup>(98)</sup> sBran bsTan pa の対音を示すのであらう。昔、この地にいた sBran 氏が大飢饉にあつて、Tsha rgyal (Tsha kho rgyal po) の配下になつたと云うのである。彼等の祖が、かつて Khams 地方に勢威を振つてゐたと云ふことも、重要な意味をもつものである。続いて云うには、<sup>(99)</sup>

また、(別の所伝によれば) Klu bsher lcags mo (なるもの) が、万戸長と意見があわず、亡命して bTsan lha の地の Sum mdo にとつてゐる所へ歸つた(と云ふ)。

と云つて、Rab brtan と並んで、一地区を構成する bTsan lha にも sBran 氏が一時居を据えたを示してゐる。bTsan lha に至つた sBran 氏も、Khams 方面から亡命して来たわけであらう。この Klu bsher lcags mo は、歴とした女王名であることに充分注意を払いたい。続いて云うところを要約すると、<sup>(99)</sup> 次のようになる。Klu bsher lcags mo の末裔であらうが、Na gtsi bkra gis hbum なる王があつて、あるとき、ふとした不用意な発言から湖神の怒りたふされ、雷に国を毀れさせられ、やはり、So man 王の許に至つて臣下をとつた。その子孫が Khu hjo の地を領して、Khu hjo gon, hog の二家が、Rva rgan の家ととも、(sBran 氏の系統から) この世に現れたと云うのである。この説明をばいひきりするが、Rva rgan の掃投した Tsha rgyal とは、So man 王家のことだつたのである。更に説明して、<sup>(99)</sup>

(この So man 王家は) 前述の政治上の意見が合わなかつた(云々の)三王子の系統であるとも云われる。と云へば、(So man) 王家と大臣家 (Rva rgan, Khu hjo gon, hog) とは同一の家系 (sBran 氏) となる。

とある。以上を要約すると、Rab brtan から引つゞ So man 王家をたてていた吐蕃王の末裔、sBran 氏が、rDo rol の sBran 氏と bTsan lha の sBran 氏、ふちれも Kham 方面から亡命した祖先をもつものだが、両者を大団にして Tsha ba ron の王を称してつたとしようのである。「寺院総攬補」は「gSum の rGyal mo ron の hgas dogs (国王) は sBra が手を入れた。」と称してゐるのは、これらの事実をなすのであらう。

つゞ、rGyal mo tsha ba ron は、phyi dar 以後、主として Iha rigs sGo' のまゝ Kho hphan の拠るゝにあらうであつた。「後期には Iha rigs sGo が (支配者として) 挙げられる。」としよう記述と、sBran による rGyal mo ron の支配は、どのように結びつのであらうか。この解答は、既に見たところで示されてゐるのである。四土の住民はすべて獐獐子の言語圏内にいた。また、四土の女士司には、自らの氏名として、「索朗(浪)」の後に「郎」または「谷」を加わえて示すものがあつた。So man の王家は、父子によつて家系が相續されながらも、母権は、sBran 氏出身の母から嫁に繼承されていた。これらの三項に加わえて、「rGyal (mo) ron の王国は、これらその氏族が sBran である。」「その部族は Tsha kho としようのがあり、<sup>(87)</sup>とする記述を並べると、結局、rGyal mo ron の sBran 氏は、或る時代以後、同時に Iha rigs sGo' そのものであつたとしようことになる。具体的に云ふ換へると、Tsha rgyal を称した So man 王家も、卓克基や松岡の女士司と全く同様に、「郎」rlans 氏に内属する「谷」Kho/sGo を父系としていたとなるのである。

rGyal mo tsha ba ron は、phyi dar 以後、専ら Iha rigs sGo の支配を受けたが、西蕃りの rGyal mo ron は So man 王家が成立するまで、この方面の内実は、母権を繼承した sBran 氏の手次第に帰するようになって

つた。極端にいえば、sGoは父系としてその氏名をとどめるだけの存在になつたのである。吐蕃王家の親戚とされるsBran氏に、資格を示す異名として、Shan poの名を許すならば、So man王家を中心としたrGyal mo ronのsBran氏とよまるところ、Shan po sGoである。「寺院総擔補」と「mi bu六族はShan po sGoを加わえて七族となる。」と結論しているのは、sBran氏が、東側のsGo氏とも婚姻関係を通じて結びつき、rGyal mo tsha ba ron一円に広く根を張るに至つたことを述べているものであらう。

ただ、東北寄りの獫夷の土司にはその氏名として「郎」rlaisのみを示し、「索朗」sBranとの関係を全く表さないものがあつた。彼等はsBran氏を母方に迎え入れることがあつても、歴代sBran氏を迎え続けて母権を中心とした社会をつくるに至らず、rlais氏またはsGo氏古来の父権制社会を維持して来たものであらう。このような分析は、Liu氏の観察結果によつても充分保証されるように思われる。Liu氏のいうところでは、rGyal mo ronでも、東寄りの五屯の住民と、So manを含む四土の住民とでは生活様式に相当の開きがある。獐獮種(HHarsigs sGo/Tsha kho)の本拠とも考えられる前者では、殆んどが農耕のみに依存して、僅かの牛馬を山地で飼育するに留るが、sBran氏の拠る四土方面では、人々はCh'iangの人々よりも更に高地に住み、牧畜と農耕を兼業するといふことである。<sup>(10)</sup>

今、仮にrGyal mo tsha ba ronの住民を等しくShan po sGoの名で呼んだとしても、東側では、母系の氏名を便宜上名字(rus phran)に転用したrlais氏の称名法による呼び方となるが、西側では、四土の土司名の場合のように、Shan poによつて母系を、sGoによつて父系を示し、家の名としては前者に重みを与えた呼び方になる

わけである。次の章で見るように、rLans 氏と sBran 氏の接触は非常に古く、rLans 氏のこの称名法自体が、後者の称名法に由来するのかも知れないのである。

### 五 sBran 氏の東女國

先に見たように、So man 王国の祖は、Rab brian (の sBran 氏) から分れたものと伝えられ、So man に服属し、Khu hjo の祖となつた sBran 氏も、古くは bTsan lha に留つたことがあるとしよう。同じく、So man 王家に帰投した Rva rgan の祖も、rDo rol 地方を支配した sBran 氏であつた。Khu hjo の祖となつた sBran 氏は Na gtsi を称してゐたから、rNa pa を父系にもつてゐたのに違いない。これら sBran 氏の祖がとどまつてゐた各地について次に見ることだしよう。

bTsan lha は、<sup>(107)</sup>らわゆる dGe shi rtsa 十八小王國の一つで、「金川瑣記」に、

小金川、原名<sup>二</sup>價拉<sup>一</sup>美諾為<sup>三</sup>其巢穴。……折<sup>二</sup>價拉<sup>一</sup>為<sup>二</sup>懋功、撫辺、章谷三屯。

とあるとおり、小金川の名との名であり、対音は價拉と示され、三地区から成る。チベット側では「寺院総攬補」<sup>(108)</sup>に、

Eyes smad, bSod nams yag, Seh ge rdzoh, Hya non

を bTsan lha 四國として挙げ、bSod nams yag 一つたちえ十八も酋長がいてと加えている。

Rab brian については、「寺院総攬補」に Bon 教の聖地として聞えるとして、Bon 教の教義を研究する大利



gYun drun lha stein が、清帝の命令で dGe lugs pa に改宗せられたとの説明がある<sup>(104)</sup>。その位置は、大金川河沿いの bsTan pa 丹壩<sup>(105)</sup>より北にある。「寺院総攬補」には<sup>(106)</sup>

Chu chen の南側には、bsTan pa, Rab brian, bTsan lha などの王国があるが、最後の二つは勢力が強かつたため、蒙古王の時代から、その支配下に入らずにいたという。乾隆帝の時に阿 (A can jun) 將軍が軍を率いて、十二年の長きにわたつた戦いの後 (清の) 治下にいられた。

とあつて、Rab brian と bTsan lha とは、一方が、乾隆十四年に一旦清に降つた後、同二十三年頃から再び動きはじめ、三十九年に清に鎮圧された大金川の郎卡と索諾木の拠つた地を、他方が小金川の澤旺と僧格桑の拠つた地を夫々指すもの<sup>(107)</sup>とわかる。bTsan lha が小金川であることは既に見たとおりである。したがつて、Rab brian の方は大金川の地に比定しなければならなくなる。

大金川は、金川瑣記<sup>(108)</sup>によると、

(大) 金川、原名ニ促浸、噶拉依為ニ巢穴、旧官寨在ニ勒烏囲。

とあり、同書に更に、

夷俗稱ニ土司署所ニ為ニ官寨。…大金川官寨有、四、一在ニ噶喇依、今崇化營盤地基、一在ニ勒烏囲、今隸ニ綏靖屯ニ僅存ニ瓦礫、一在ニ馬爾邦、今隸ニ崇化屯ニ巍然尚存、一在ニ独松、今隸ニ綏靖屯ニ危礪峻牆屹立望表為ニ逆酋倉廩。其在ニ噶拉依ニ者逆酋索諾木常居地。

とある。大金川河沿いの順は「四川通志」卷二十一輿地山川、懋功直隸廳、綏靖屯の条に

金川大河……過綏靖屯而西、至崇化屯、収功噶山水、歷馬爾邦、巴底、巴旺西南流、至章谷、会小金川(河)。

とある。「西」とあるのは、今日の地図によれば、「西南」であり、「西南」とあるのは「南」になつてゐる。馬爾邦までは大金川に属し、巴底 (Ba sti)、巴旺 (Ba bam) は別ブロックを形成している。つまり、「寺院総攬補」の中に bsTan pa で代表されている地区なのである。小金川を bTsan lha (儂拉) というように、大金川地区を Rab brian と名づけていたものであろう。一つの地区は元来、合わせて金川と呼ばれていたらしく、「聖武記」の「乾隆初定金川土司記」によると、雍正元年に金川安撫司に任ぜられた莎羅奔について、

莎羅奔自号大金川而以旧土司澤旺為小金川。と述べている。

金川の名はかなり古く、隋書の地理志卷二十九、汝山郡の通化の項に「開皇初置曰金川」とあり、元和郡県圖志卷三十二の茂州の通化県の条には、

隋開皇六年以近白狗生羌於金川鎮置金川県。

とある。この場合、白狗羌の巢窟が金川の名のおこりになつており、白狗と金川の関わりも示されているわけである。また、通化県の西側に今問題にしている金川があることも理解される。

rdO rol については、「寺院総攬」に、僅かながら触れるところがあるので次に引用しよう。mGo log のある王が三子(四子の一人は僧)に領地を分けたことを述べて、

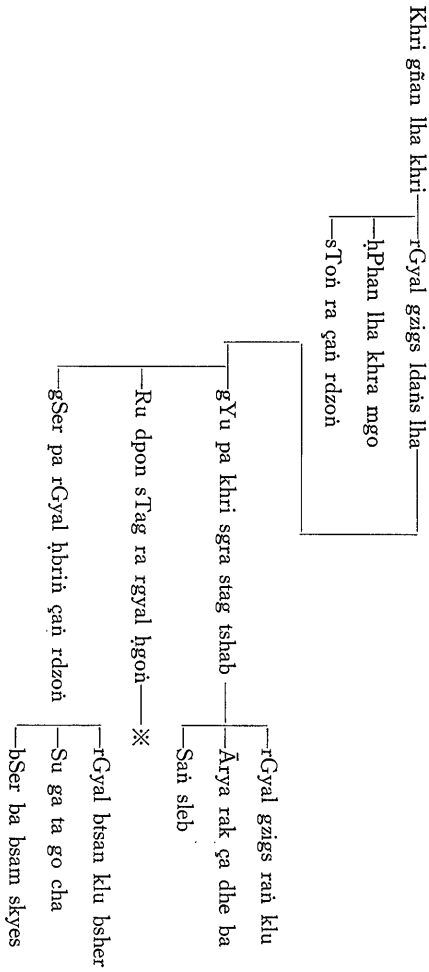
トのト rDo rje hbum などは rDo rol の地と部民を、中のト Padma hbum などは hDzi rkahi khog を、下のト Padma yag などは sMar rol の地と部民を与えた。rNa khog の部民、gSer khog の貢物、gYu khog と rTsan khog との土地と部民は共有とした。

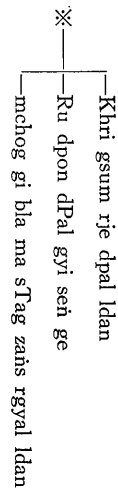
トのト rDo rol, sMar rol などは rDo chu sMar chu (註) の沿岸をさうじ、今日の地図には独柯 (rDo khog)、麻耳柯 (sMar khog) などは hDzi rkahi khog だ、この間に挟まれた、今日の地図では日耳卡と示されるところである。トのトの東側は rNa khog, gSer khog が、北側は rTsan khog, gYu khog が夫々接している。そのなかの rNa khog だ、rNa 氏の地、rNa gul (回疆)、rNa pa (回疆) をさうじ。一語 Rab brtan と留り、後には Khu hjo の祖となつた sBran 氏が Na gisi を稱してつたのは、かつてこの地方にあつて rNa 氏を父系としたからであらう。(註) gSer khog だ、gSer po の地を指し、The bo 鉄布の南にあり、雪児トとか、殺鹿、または色と音写されるが、その本拠ともういふべき地は下藩州の漳臘である。このことは別にわたくし示したので再説しない。(註)

トのト、この gSer po だ、gSer が、これはまた sBran 氏の祖と関わりをもちつたと想われ、rLans po ti bse ru が述べるところを引いて、rLans 氏の拠地としてつて、"gSer hdzin gSum rMe yul beas" (gSer po を領し、rMe yul と共に gSum) と引いてつて、(註) gSum だ、Sum pa の rLans 氏である。うしろに gSer po を領し、rMe yul を支配してつたとの語である。rMe yul だ、rNa stod の地と續き、「寺院総攝補」には、"rNa nin dMeli sa" (註) と書及やれつて、rNa 氏の南側に位置を与ふる地である。rNa 氏は、既に見たとおり sBran 氏と古く関係がある。gSer po だ、この rNa 氏の東側に位置を与へ、dMe の地 (表黎 rMe tshan、表羅 rMe ba)

の北に接し、共に rLans 氏が支配をわけていた。この地でも rDo rol 方面から sBrain 氏の勢力が流入したと当然考えられていた筈であらう。(註)

gSer po が rLans 氏の領有をわけていたゆえに、金川の rLans 氏の所領として、gSum pa rLans kyi Gyim god と呼ばれていた。(註) gSer po を領したと思われる gSer pa と、金川を支配した Ru dpon とは、g-Yu khog と君臨したと見なしている gYu pa と共に、また mDo smad gYar mo than の rLans 氏から分れてくる。rLans Po ti bse ru の示す系譜は、(註)





とある。三系に分れるに至つて仏教徒風の名前が現れるが、それ以前も、典型的な吐蕃王朝の権臣型の名称が続いてゐる。<sup>(87)</sup> gSer pa 系の Su ga ta go cha 及び Ru dpon dPal gyi sen ge<sup>(88)</sup> されて g-Yu pa 系の Arya rakga dhe ba は、<sup>(89)</sup> かつての Sad na legs 及び Sum pa の rLans 氏のうらひ、はじめて仏教徒に転じた人として IHo brag chos hbyun に示されてゐる。彼等の転宗は、八世紀の末に当る筈であるから、三家に分れたのは、八世紀中頃に在つた。gYu khog, gSer pa, Gyim god の三地区は、それ以前の時期におつて、rLans 氏の本家ともつうへんき mDo smad gYar mo than の rLans 氏のゆゑに統一されて掌握されてゐたに違ふなう。rLans 氏が八世紀の中頃、hBal 氏と共に中央政界であつて有力な blon po をつとめていたことは、既によく知られてゐる。彼等は Khri lde gtsug rtsan 王の死後、Nan lam sTag sgra klu gon の誅を受けて失脚し、七五五年に資産を没収されてい<sup>(90)</sup> る。この世の rLans 氏は、Lan myes zigs といふたが、gYar mo than の rLans 氏本家に連なるものであつたに違ふなう。Po ti bse ru の系譜に見られる限りでは、この本家筋の歴代の名が、特に王朝風であること、既に見たように、古代史の正史とも云へる IHo brag chos hbyun に、この家系の三人にのみ言及があることなどを考へるべきであらう。Myes zigs が誅に服する、rLans 氏本家の統制力は失われ、Tsha ba ron 及び mDo bsher nag po の系統で、他の三地区は、既に見た三家の手に夫々分割されるに至つたのであらう。Gyal nag の系統と

呼ばれる mDo bsher nag po は、<sup>(註)</sup>Ston sras の系統の rgyal po Khri hbar ka lün (l'gün) gseb の長子、mDo bsher rin po を云ふ異名であるか。この系統の実権が、phyi dar 以後では sGo rse の系統に次第にとつて代られたのであらう。

これらより先の rLais 氏本家と Shan rgyal の関係について、七世紀中頃の事情と思われる記述が、旧唐書の卷九十七に見えてくる。その大意は、

東女国西羌之別種。以<sub>二</sub>西海中復有<sub>二</sub>女国<sub>一</sub>故称<sub>二</sub>東女<sub>一</sub>焉。俗以<sub>二</sub>女<sub>一</sub>為<sub>二</sub>王<sub>一</sub>。東与<sub>二</sub>茂州党項<sub>一</sub>接、東南与<sub>二</sub>雅州<sub>一</sub>接、界、隔<sub>二</sub>羅女及白狼夷<sub>一</sub>。其境東西九日行、南北二十日行。有<sub>二</sub>大小八十餘城<sub>一</sub>。其王所<sub>レ</sub>居名<sub>二</sub>康延川<sub>一</sub>。中有<sub>二</sub>弱水<sub>一</sub>南流、用<sub>二</sub>牛皮<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>船以<sub>レ</sub>渡。戸四万余衆、勝兵万余人、散在<sub>二</sub>山谷間<sub>一</sub>。女王号<sub>二</sub>為<sub>二</sub>賓就<sub>一</sub>、有<sub>二</sub>女官<sub>一</sub>曰<sub>二</sub>高霸<sub>一</sub>。平<sub>二</sub>議国事<sub>一</sub>、在外官僚並男夫為<sub>レ</sub>之。其王侍女數百人、五日一聽<sub>レ</sub>政。女王若死、國中多斂<sub>二</sub>金錢<sub>一</sub>、動至<sub>二</sub>數万<sub>一</sub>。更於<sub>二</sub>王族<sub>一</sub>求<sub>二</sub>令女二人<sub>一</sub>而立<sub>レ</sub>之。大者為<sub>二</sub>王<sub>一</sub>、其次為<sub>二</sub>小王<sub>一</sub>。若大王死、即小王嗣立。或姑死而婦繼、無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>篡奪<sub>一</sub>。

とありて、hPhan po rLais 氏が、Kho 氏を配下に、sBran 氏の女王の patron として、茂州の西、雅州西北、mDo smad gYar mo than を支配し、女王をして金川に居を定めさせていたことが明らかにされている。

新唐書の東女国伝には、別に考察する予定の西方の女(東女)国に関する記述が甚だ多く混入しているが、旧唐書の記載事項を置換えてしかるべきものも含んでいる。その一として、「王号<sub>二</sub>賓就<sub>一</sub>、官曰<sub>二</sub>高霸黎<sub>一</sub>猶<sub>二</sub>言宰相<sub>一</sub>也。」とあるのを見る。この方では、「賓就」を王の号とし、「高霸黎」は宰相を呼んで云うらしいとしている。「賓就」の古典音は *pien dz'iq'w'* <sup>(註)</sup>ひまろ、hPhan tshenju の対音で、疑いもなく hPhan po rLais 氏を指し、女王の夫を

云う。「高霸黎」は、新唐書の後統部分に、「顯慶初遣使高霸黎文与王子三盧来朝……」とあるうちの固有名詞「黎文」の「黎」を誤つて混入させただけなので、旧唐書が示すように「高霸」でよい。「高霸」の古典音は *kau pak* だ、*Kho (sGo) pa* を云う。*Kho (sGo) pa* は *Kho (sGo)* 族という意味である。つまり、今日の猓夷、または元の祖にあたる *Tsha ba roh* の *Kho* 同時代の中国資料で「白狗」と伝えられるものを指す。彼等は、既に見たように、*Plans* 「白蘭」の配子になつていた。「猶言宰相」の意味は、*Kho (sGo) pa* の地位を示すものと取らねばならない。両者は、実は、女王そのもの、女官そのものと別にあつた「平議国事」を担当する「男夫」であり、「在外官僚」であつた。然し、彼等が女王・女官の云うがままに行動したことを「凡号令女官自内伝、男官受行」と新唐書は云う。

女王の相続について、「於王族求令女二人」とあるが、この王族を我々は *sBran* 氏と限定する。新唐書の冒頭に「東女亦曰蘇伐刺拏瞿咀羅」とあるのは、後にくわしく説明するが、*sBran* 姓を指すものである。蘇伐刺拏 *suo-b'i-ciu-la-nuo* <sup>(121)</sup> はその対音で、「亦曰」は、隋書等の女国もそういうからで、「或曰」の意ではなからう。*sBran* 氏から選んだ二女子の一を女王とし、他を副として、女王の万一の不幸にそなえた。女王の夫は、いうまでもなく *Plans* 氏だつたのである。先に、*Lab brian* の *sBran* (女国) についてのべた「寺院総攬補」の文でも、*sBran* 氏が、*Na csi* 即ち *rNa* 氏 (*Plans* に内属する *rNa* 氏であらう) を称しているのを見た。二氏名を兼挙するのは、母権継承氏族 *sBran* 氏の特徴であることも、既に観察したとおりである。但だ、両唐書の記述を解釈すれば、この母権継承制は、父方の *Plans* 氏が、代々妻を *sBran* 氏から選んで、これを女王に立てて、自ら

は外護者として女王の言に従つたものようである。決して rLans 氏が sBran 氏に生ませた女性を女王にしたたのではないらしい。このことは「姑死而婦繼」ではいきり表わされている。<sup>(187)</sup>

女王の所居は兩唐書とも、「康延川」であるところ。「康延川」は *kang-ian-tš'wän* の古典音もが、「金川」<sup>(188)</sup> *kiam-tš'wän* の異写字である。両者の指すところをチベット語では Gyim god と示す。Rab brtan と bTsan lha へ跨る地区がそれであることは既に見た。<sup>(189)</sup> Rab brTan は So man の女国がかつてあつたところ、bTsan lha は、Khu bjo の祖が古くに留つた地である。彼等が sBran 氏であり、母權繼承の伝統をもつことも確認したところである。しかも、この地は Sum pa rLans kyi Gyim god と云ふ古名を帯びる。「南流」する「弱水」が大金山河であることに異議を挟む余地は全くないといつてよい。「東西」の幅「九日行」程、「南北」長「二十日行」程の境域は、hPhan po rLans の支配した mDo smad の gYar mo than の大きさに重なる。清代ではあるが、土司の拠る重要地点として九十前後がこの地域に数えあげられることも参考になるであろう。<sup>(190)</sup> この東側に党項の蘇氏が控えていた点は清代でも同じであつた。<sup>(191)</sup> 又、羅女蛮、白狼夷というのは Lo lo (Ga ro 猓羅) と Mosso (麼麼 mDo、盤牛種) を云つたのであれば、古くも今もやはり、とりまく事情に大きな変化はなかつたと見てよいであろう。<sup>(192)</sup>

#### 六' sBran/Gyim po/gSer po ~ Suvarna

これまでのところを綜合してみると、mDo smad gYar mo than に君臨してつた hPhan po の rLans 氏つまり、白蘭は、白狗羌を配下に、顯慶初め頃、既に東女国を經營していたが、この頃唐に遣使したということにな



rlans 氏を含めて Sun pa の諸氏は<sup>(13)</sup> Khri slon btsan の歿(596/7)後、Sroñ btsan sgam po の宰相 Myan Shan snan の説得に<sup>(14)</sup>応じて吐蕃に帰順していた。が、六三五年に吐蕃が吐谷渾の併合を決意し、六三八年に唐と対決の姿勢をとりながら松州を攻めた時、あらかじめ白蘭、党項の勢力をあらためて制圧しなければならなかつた。<sup>(15)</sup>白蘭は元来吐谷渾が窮地に立つと逃げこむ土地であつた上、吐蕃本土からは遠く、中国に最も近かつたため、吐蕃は、常に完全な帰順を彼等に求めて止まなかつた。西暦六四九年 Sroñ btsan sgam po が歿すると、後事を委ねられた mGar sToñ rtsan の目はここに光つていた筈である。果して、顯慶初年の唐への遣使は嵐を呼んだ。

顯慶元年十二月、吐蕃大将禄東贊率兵一十二万、撃<sup>(16)</sup>白蘭氏、苦戦三日吐蕃初敗後勝、殺<sup>(17)</sup>白蘭千余人、屯<sup>(18)</sup>軍境上、以<sup>(19)</sup>侵<sup>(20)</sup>掠<sup>(21)</sup>之。

とその様子が伝えられている。<sup>(18)</sup>この行動は、結果的には、その後六七〇年に完成する吐谷渾合併に連なり、具体的行動再開の第一歩となつたものである。たとえ、この白蘭が即ち東女国だとまでいえないにしても、白蘭の、それも有力な hPhan po rlans 氏が東女国の経営に當つていただけは確かである。東女国が唐に遣使すれば白蘭が制裁に会うのも当然である。禄東贊とは mGar sToñ rtsan である。

こうして、hPhan po rlans 氏と結んだ東女国を、rlans 氏との結合が同様に明らかかな So man 等の女士司の祖と見なす限り、既に見た後者の伝承のいくつかによつて、東女国は或る時期に吐蕃本土寄りの Khams 地方から移動してきたものであることを認めなければならない。それが何時の時期であるかということ、元来どの地域にい

た何如なる氏族であつたかといふことなどが問題となつてくるわけである。これらのうち、移動の時期は、後述のように開皇六年以前に求められよう。しかし、それ以上のことは、彼等の出自（吐蕃王家との具体的な事実関係）の問題も含めて別にくわしい論を立てねばならない。今は如何なる氏族であるかといふ問題の一部を、これまでのところをまとめながら考えて見よう。

既に見たとおり、So mah 等の女土司の氏の名の sBrah はそのまま東女国の女王継承権をもつ王族の名である筈だから、新唐書に蘇伐刺拏<sup>(14)</sup>とあるものをそれに対するものとみなしてもよいわけである。しかし、旧唐書ではこの名は全く示されていないので当然、新たな史料から補筆したものと考えられるわけである。この史料を松田寿男氏は西域記だと指摘し、佐藤長氏も支持するが、恐らく誤りないであろう。とすれば、筆者のように四川の東女国と西域記の東女国を全く別のものと見るものにとつては、最悪の場合、西の「東女国」に対していわれた「蘇伐刺拏暨咀羅」が単にまぎれこんだだけのこととなり、これを取りあげる意義もなくなつてしまふ。だが、果してそうであらうか。四川にあつた南北に長い東女国の記事に、「東西長」で、その位置も「東接<sup>二</sup>土蕃国<sup>一</sup>、北接<sup>二</sup>于闐国<sup>一</sup>、西接<sup>二</sup>三波詞<sup>一</sup>」とはつきり区別されるものをもつてきて、敢えて増補したのは、必ず歴とした理由があつたに相異ない。単に西域記に「東女国」とあつただけでは充分でない。少くとも sBrah の名を知つた上で「蘇伐刺拏」としたのに違いない。<sup>(15)</sup>これだけある記事の相異を越えて増補に史家を踏みきらせるには、おそらく sBrah が Suvarna に基づく名であることを確認させる史料もあつたからであらう。だからこそ「亦曰」としてこの名を示したのである。

このような想定には勿論根拠がある。既に見たように sBrah 氏が古くに拠つた四川の地は Sunn pa rLan's kyi

(gLañ gi) Gyim god とよみたり其地也。其の Gyim god 也「金川」をよみて其れなり。Gyim god の god 也 roñ を lun のよみたり「國」(谷間の居住地)を意味し、全体は「Gyim の地」といふのに等し。今 Gyim が「金」をよみて其れなりと云ふはかりなり。『黄金』を意味する中国語「金 *kiam*」に由来するものと仮定すれば、Gyim god 也「金(氏)の地」を表わすことなる。とすれば、其に住む氏族に名づけられる sBran の呼称といふも当然「金」の意味を擬したくなる。これに對して梵語の *suvarṇa* を見つけ、そのチベット語化したものといふ sbran を認めるのに誰も困難を感じなすべし。

「Gyim の地」の sBran 氏を對し、hPhan po rLains 氏は支那を對し、gSer po の國なる。gSer po の國也、なりし sBran 氏の祖が轉じた其の國也。rDo rol や、sBran 氏の父系となつた rŊa pa の國 rŊa khog の東に接し、その地を sBran 氏が占めたのは、なつかと疑われ。若しその地あれば、其の國を「金の地」と呼ばれしやうと思はる。あまり由来を究むるが、gSer po は「金の人」とあり、その國 gSer khog 也「金の國」とあり。

これだけ整理せば、最初の設定「Gyim は金に由来する語である」とを認めては、いふほどの難事かと思はる。敦煌文書の藏文記述「Kog yul gyi rGya [hi] Gyim po」「Kog の國の南側の Gyim po」といふ言及がある。若し其の Kog yul を後述する mGo log なる地方と見れば、rDo rol (rDo khog), sMar rol (sMar khog), hDzi rka khog (hDzi khog), rŊa khog, gSer khog, rTsan khog, g-Yu khog などは、gSan khog 西疆の Hor khog を併せしむるものとせば、その南側の Gyim po といふは東疆の (gSer khog の) gSer po なるべし。

もよいであらう。これでもまだ「Kog yul の Gyim po とは後年 sSer po とも呼ばれた sBran 氏であつた」と云えないであらうか。

四川の東女国伝に加えられた「蘇伐刺摩」の意義は、以上で少くとも承認されたと思う。

「金川」で写される Gyim god の意味が「sBran 氏の地」であるから、隋の開皇六年に金川県が置かれたことは、既に茂州に近く sBran 氏が居住していたといふことである。また「白狗生羌に近い」ことが置県の理由になつてゐるから、白狗と sBran 氏の結びつきも常識となつてゐたのである。とすれば、東女国の構成要素は西曆にして五八六年頃一応整つていたといふことにもなる。ただ、隋書や北史にさへこの東女国の所在を四川のうちに確認しておらず、剩りて、西方の女国伝中に「与……党項戦争」との記事を混入させてゐる。従つて、この東女国の成立は決して古くとも遡らない筈である。

(東京大学文学部助教)

略号と文種

- DG. I, dK'on mchog bstan pa rab rgyas : yul mDo smad  
kyi loñs su thub bstan rin po che ji har dar  
bahi tshul gsal bar brjod pa deb ther rgya  
mtsho, 412ff. 1869, bKra çis dkyil, dGah ldan  
chos hkhor glin 版
- DG. III, dK'on mchog bstan pa rab rgyas : Deb ther rgya  
mtsho las/Kha gya tsho drug nas rGyal mo tsha  
ba roñ gi bar gyi dgon sgrub sde phal cher
- DTH. J. Bacot, F. W. Thomas, Ch. Toussant : Docu-  
ments de Touen-houang relatifs à l'histoire du  
Tibet, Paris, 1940, Pelliot 本 nos. 1286, 1287,  
1288, Stein 本 Or. 8212 (187). 収録
- DG. bla ma bTsan po sMin sgröl no mon han- hDzam  
glin chen pohi rgyas byad, 146ff. 1820; the  
University of Washington (Seattle) 藏写本の
- bahi dkar chag tho tsam bkod pa, 272ff. 1869,  
bKra çis dkyil, dGah ldan chos hkhor glin 版

- T.V. Wylie による出版本。cf. GTD.  
 Kin p'eng: Etude sur le Jyarung, Dialecte de  
 雜谷腦 Tsa-kou-nao, Han-Hiue, Vol. III, Pékin,  
 1949, pp.211—310.
- GSR. B. Karlgren: Grammata Serica Recensa, Stock-  
 holm, 1964.
- GTD. T.V. Wylie: The Geography of Tibet according  
 to the 'Dzam-Gling Rgyas-Bshad, Roma, 1962.
- KGT. dPa'ho gtsug lag hphren ba: Dam pa'hi chos  
 kyi h'khor los bsgyur ba nams kyi byun' ba  
 gsal bar byed pa mkhas pa'hi dgah ston (Ho  
 brag chos h'byun'), Vol. Ia, 155ff. 1563, (1545—  
 1564). IHo brag g'Nas kyi gshis kha 版
- LPS. rLans kyi gdun-brgyud Po ti bse ru. Rai Bhadur  
 g'Dan sa pa 氏所藏写本
- SGT. 'Nag dhan blo bzah rgya mtsho: Gaus can yul  
 gyi sa la spyod pa'hi thos ris kyi rgyal blon g'iso  
 bor brjod pa'hi deb ther rdzogs ldan gshon nu'hi  
 dgah ston dpyid kyi rgyal mo'hi glu dbyans,  
 113ff. 1643.
- TAM. R.A. Stein: Les tribus anciennes des marches  
 Sino-Tibétaines, Paris, 1958.
- TLC. Liu En lan: Tribes of Lian country, Journal of  
 the West China Border Research Society, Vol.  
 XV, Series A, 1944.
- TLT II. F.W. Thomas: Tibetan literary texts and  
 documents concerning Chinese Turkestan, Pt.  
 II, London, 1951.
- TTK. G. Tucci: The tombs of the Tibetan kings.  
 Roma, 1950.
- 「考異」山口瑞鳳『古代チベット史考異(上)』、東洋学報  
 四九卷 三一—四号、昭和四一—四二年
- 「中図」中華民国地図集、第四冊
- 「蘇毗」山口瑞鳳『蘇毗の領界』、東洋学報五〇卷、四号、昭  
 和四三年
- 「白蘭」山口瑞鳳『白蘭とSun pa のrLans 氏』、東洋学報  
 五二卷、一号、昭和四四年
- その他利用したものは次のとおりである。
- 越縕序志(光緒)、『後漢書』西羌伝、冊府元龜、四川通志(乾  
 隆)、嘉慶—後者を用いた場合、文中の「とんちんかた」  
 小方壺齋輿地叢鈔、第八帙(蜀徽紀聞)、金川瑣記、平定回  
 金川述略)、『松潘原志(民国)』、新旧兩唐書、魏武記(平定  
 金川土司記)、『通鑑』明史、理蕃序志(同治)、『dPag bsam  
 ljon bzän の Rehu mig (中葉)』、『Deb ther snon po 卷。』

## 註

- (1) LPS. p.47a.; rLans kyi grub thob chen po rGya rag ga tis Sum pa tsha ba kluns sgan riñ mor sdom bu la byon pañi dus su/Ron chen Kha ba dkar pohi shol du byon pa la.
- (2) 四川通志、卷二十一輿地山川、雜谷直隸厅筆架山在「序西四里」隔江、「一統志」一名九子竜窩「或謂之玉山。」理番厅志、卷一輿地山川「筆架山……形如筆架、一名九子山、又謂之玉山。」九子屯は五屯の一である。註48参照。
- (3) Ron chen Kha ba dkar po と同じである。四川通志、卷二十一(註と同じ)の方には「大溪(一統志在「序城西」源發「俊磨土司東界大雪山」西南流。」とあり、理番厅志(註と同じ)の方には「雪山……一統志云、在「威州西南一百里」山有「九峯」」とあるが、いずれかに擬せられよう。そのStein氏は、このKha ba dkar po は同じ「雪山」のTsha ba roñ を Kham s G Tsha ba roñ (Tsha god) と同じである(TAM. p.27, n.63; JA, 1956, p.348)。「屹々」は DzG. 75b; GTD. p.180, n.594) が、同じ Sum pa と指定しては、Kha ba dkar po は「峯」を注意した。注意した。
- (4) 本文の最初の引用文(四頁)中に見える。
- (5) T.L.C. pp. 3—4. Giarung など Ko の異同について、本文第三章二三頁で論じた。
- (6) Deb ther rgya msho の第三部の標題は「rGyal mo tsha ba roñ」の名を示す。Khri sron lde btsan (742—797) 代に Vairocana が追放された土地が「rGyal mo tsha ba roñ」である(Lo pan bkah than f.37a, Padma than yig. f.156b, Toussaint 記 p.300)。また mGar sTon btsan yul zun が唐から帰るとき、唐側のつげ人を誘って姿をくらましたところを Mani bkah hbum (f.212a) が示す土地の名は「rGyal mo tsha ba roñ」である。この「rGyal mo tsha ba roñ」は「白蘭」大「一頁」を註49参照。
- (7) Tsha ba roñ は、或場合は、岷江に注ぐ方の雜谷河沿いの谷間、五屯方面を中心としていうようであり、この場合「rGyal mo roñ」の方は、俊磨川から大金川河にいたる谷間、四土方面である。他の場合は、註16に述べるようにを参照。五屯、四土と同じ、註48参照。
- (8) 番州の rLans 氏と同じは「白蘭」二七一—二三三頁参照。
- (9) rLans 氏が、今日 Chiang 系総称をよめる Selju (緬譯「蘇」), rGod Idin, rTse hthon の王を称する Selju である、rLans po ti bse ru の記述(Selju mi khri rta hbum de yan rLans la yod. f.49a, Selju mi khri rta hbum

rod. f. 53b, rGod lhin btsan. 12a, rLans rje rTse hthon [che] 10b, Khri rje rTse hthon [che] 12a) などについては分りかねる。本文二三頁で見ると、後で「彼等」の内属する文 Ko が Ch'iang と書かれるわけである。清代の『雑谷東部の土司』には蘇氏の名が見られるが(大定沙壩土司蘇尚榮、沙壩安撫司蘇朝仕、水草坪巡檢土司蘇尚鑑—四川通志、卷九十六武備十司)、これは Gia-rung の支から独立した Ch'iang と考えられるであろう。

(9) Gyin god の gSer po などについては、本文第五章で触れられている「白蘭」二二—二五、二二—二三頁参照。

(11) 「白蘭」八一—九頁参照。

(11) 「中説総論補」二二の「Dg. III. の監字」に、*de* Deb ther rgya misho 第三説を指して仮と称した名である。引用文は f. 258b—259a である。Tsha chuhi rgyud du bstan pañi lcags ri Tsha ba khag gSum du bstrags pañi rgyal sa yod/hdi la lo rgyus sna ishogs snah yan/ rGyal ron rgyal khag thams cad kyi rus sBra yin par bcaḍ/rigs der Tsha kho ran skad Lan csi zer/de yan Bod kyi rigs la bSe, rMu, lDon, sTon, bshi/rigs bzain rnamas la snar Shañ po, physis lHa rigs sGo zer/...(中略)…/sgruñ las mi bu rus drug Shañ po sGo dan bdan zer/deñi nan nas bSe dan sBra gcig par bcaḍ lajñon

gyi rgyal rabs rnamas su bSe Khyun hBras zer ba dan gcig gam sñam/hgag dog mo gSum de sBra la thob/ sBra dpah rtsal che ba de yi don/!shes pa lkar/mDo khams ron chen bshihñi nan tshan rGyal ron hgag dogs gSum sBras thob/

(12) Tsha ba khag gSum の khag 是 khab と相対する意味であること。このことは、ついでに rGyal ron rgyal khag thams cad [rGyal ron の中国タイプ] などを用いた示すところでも、明瞭である。rNa pa khag gSum (Dg. III. f. 240b) 「gSum の rNa pa 國」なども、證據である。

(14) hgag dog mo 是は hgag dogs の khag と殆ど同義のものと見られる。hgag 是「酸味」の意味である。注(1)の khab の同義語と見えて khag と同じ語根である。敦煌文書には、「khab tu bshes」(「酸」の意味)の bkvag という形が用いられた例がある(考異)上、四九、七九頁註(2)参照)° bkvag 是 bkgag の原型である。hgag の他動意味である dog (mo) 是 sa dog と綴られる( DTH. p. 81)° yul yab, dog yab (DTH. pp. 81, 99—100) のように対応する藏語などは、「國土」の意味である。このように、*de* khab 是「酸味」となり、*de* sa 是「國」というように、

な<sup>9</sup>。R.A. Stein 氏は gSum を數語として、‘hgag dog mo gSum’ を ‘Trois Dénifés Étroits’ と記してゐる (TAM. p. 27)。

(25) gSum の用ゝ方は rNa pa khag gSum, Tsha ba khag gSum, hgag dogs mo gSum, rGya roñ hgag dog gSum, rGyal sa gSum, gSer hdzin gSum などである。この gSum は、數語ではなくて、普通の Sum pa, Sum yul, Sum khams (DTH. pp. 80, 101, 111) の Sum の異體字である。普通動詞と係詞とを区別する。Sum pa, Sum yul の Sum が、數語の gsum と關係があるのかないかは不明である。ただ、口語‘參狼’藏牛とて、譯稱の rna から參狼を引く。これを口語と同一視するべき。參狼の參は Sum pa の Sum を、狼は rNa と共に rLans を引いて rNa n ga 出来る。とすれば、Sum は、特 rLans 氏を指しては、俗稱 rna n とはなるのである。註は参照。

(26) Tsha chu とするのば、順江と併し、雜谷河と同一である。本文は、次の文に rna n ga とある。de nas nñ lam gñis tsam gyi tshod Ri rdzas rgyal sa nas Wam bahi chu ham rNa chu dan sMar chu hñres Brag par brgyud rDzin hgag nas Tsha chu dai hñres te rGyal roñ chu chen du hñab bo/DG. I. f. 258b. rGyal roñ chu chen は大金川河とあり、rDzin hgag (mdzon hga

DzG. 77a) は松岡とあるから、rNa chu を sMar chu の合流したものと、rDzin 新たに合流する Tsha chu は、中国資料で見える後磨河とある。とすれば、雜谷方面より流れ出て、後磨河に合流する河を Tsha chu と呼んでゐるのである。四川通志、卷六輿地沿革の懋功庁の条に「番人稱大金川曰促侵」とあるが、促侵は Chu chen の対音を示すとは明かである。引用文の Chu chen は大金川河の方である。DG. I. f. 32a には、「rNa pa n Tsha kho を流れる諸説は Chu chen と合流しながら、rGyal mo roñ を通して行く。」とある。彼らは、同 f. 273b には、「rDo chu の源は gYu rise の前に発し、それと mGo log の sMar (= dMar) chu’ 一半 (東側) の Ra chu’ gSum の Tsha ba 河を合流して、一切は dñul chu (GTD. p. 184, n. 635; TAM. p. 53, n. 149) を経て、rChu chen と合流し、rGyal mo roñ をきわどりながら成都府 (方面) に進むのである。」とある。rGyal mo roñ の位置を、註で見たのより大金川河寄りに見てゐるのうかがわれる。小方壺著輿地叢鈔に収められた「蜀徼紀聞」によつて、乾隆三十七年正月二十三日の条に「三雜谷者、卓克基、松岡、後磨也」として、雜谷の位置を、rGyal mo roñ の四土のうちの東側の三つに重ねて扱つてゐるのが知られる。卓克基は後磨



と松岡の間に位置するから雑谷で、常墳は西寄りであるから、  
 rGyal mo ron 側と含まれてくるのであろう。 DT. I. f.  
 32a には「Rva chu と rNa chu が合流するところまで  
 は、Tsha kho と属し、」とあるが書つてある。 Rva chu  
 は、Tsha ba khag gSum の語流と合する Ra chu とあ  
 ったものと同じで、後磨川がTsha chu を合した後に北か  
 ら合流する一丈を本流と見た名かも知れない。この東から  
 西に流れる河が、sMar chu を合せた rNa chu と更に合  
 流するところまでをTsha kho と指定してある。  
 こうなると、雑谷のTsha kho の、広義の rGyal mo  
 ron の、rGyal mo tsha ba ron を示していることにな  
 り、この、rGyal mo tsha ba ron を示している註の  
 ことである。四十二の註を註21参照。

(17) DG. III. f. 260a 以下 rgyal po Na csi bkra cis hbum  
 とある。この王は sBran 氏(東女国系統)に属し  
 ながら Na csi を称してゐるのである。従つて、Na csi  
 の csi は、母系を指してゐる時に用いられたのかと思われ  
 る。母語で、特に父系を示す時に用いられたのかと思われ  
 る。母権継承制社会をもつ sBran 氏についての記述以外には現れ  
 ない。この意味を解すれば、当然のことである。「氏」  
 の古典音 *zic*: (GSR. 867-a) への csi が結びついてく  
 るのも不思議ではない。この地域は、古くから中国文化の強  
 い影響下にあつた点も忘れてはならないであらう。

(18) rLans は、rLan との glan とを書かれる。 rNa を  
 Na (csi) とするところから、rLan を Lan と書つたのであ  
 る。「白蘭」二三、四六頁、註の参照。

(19) R.A. Stein 氏は Kho hphan を Kho hphan とし  
 正し、敦煌文書に見えよ Go hphan と結びつけて説明す  
 るが、rLans 氏と hPhan の關係がまだ明らかでない  
 頃の記述である (TAM. p. 27, n. 66)。なぜ、hPhan po  
 等とあるかは註21参照。

(20) 「hPhan po と内属する Kho」の意味は、Kho  
 hphan とする所から、第三章の説明を参照。註の参照。

(21) hPhan gog gtogs rLans (LPS. f.53b), hPhan gtogs  
 rLans (LPS. f.52a) 「hPhan (白蘭) を服属させた rLans  
 氏」の意味である。rGyal mo hPhan po rLans「濛州の rLans  
 氏」を云ふ。「白蘭」二九—三三頁参照。

(22) この地方の獐夷または獐獐種について、四川通志や、  
 松潘県志の土司の章に記事が見えている。獐夷については、  
 越嶲府志でも述べるところが少なくないが、当面の獐夷との  
 關係は充分確かめられていない。

(23) Bod kyi mi chen bshi などの csi drañ Bod (=  
 Khams) の四大家族と云ふ意味は、Se, dMu, Doñ, sToñ  
 を本来の csi とし、その周囲に Ha sha, Mi ñag, Sum pa  
 などがあることを Se-Ha sha, Doñ-Mi ñag, sToñ-Sum pa

とどう定型の複合形式でどうなつたかといふたものと筆者は見て置く。「蘇毗」六三一―六四頁、註17参照。この問題でどういふは、古く「蘇毗」とは異つた見方、R. A. Stein 氏の Les tribus anciennes des marches Sino-tibétaines (『蒙古學』TAM 参照)を広く論じて置く。

(24) rigs bzau 古 rigs chen 今古の古義をみる。

(25) DG. III. f. 259a. yul der shon mDo bsher nag po byun dus Bai ro tsa na phebs/dehi slob ma g-Yu sgra shün po yan Tsha kho/shig bsdus pahi dban gis mDo bsher nag pohi rigs la rGyal nag gdun brgyud/Shan shuñ sBra rgyal la Shan rgyal rgyud dan/Tsha roñ rgyal po Kho hphan du grags pa byun bas de la Tsha kho zer ba byun/hdi rgyal sa gSum gyi yar mes yin no/

(26) rGyal mo tsha ba roñ 古 Yairocana を追放された者、その地を彼を逐えたの地 mDo bsher nag po を追うた。この地は Padma bKañ than (f. 156b, 158a; Toussaint 監 pp. 300—304) を bkah than gser phren (f. 220a-221a) と呼ぶ。\*だ' sBa bshed (R. A. Stein, Une chronique ancienne de bSam-yras, sha-bžed, Paris, 1961, p. 64) とするは、彼の追放されたの地、Kamalgala を追うた (Khri sroñ lde btsan が「或」) した頃 (796) と

同じらしい。この頃、Flans 氏の一部分が仏教徒になつたとも伝えられる。註 45・124・127 参照。

(27) sBra が Bod chos rgyal (古蕃王) の末裔であるとせば、第四章の So man 王家の系譜を見ることが知るが、しかし、別の機会を見た。Shan rgyal を Shan shuñ の rgyal po の略と見なしているが、この地域の諸部族は、必ず起源を Shan shuñ といふのである。それでは、固有名詞としての意義をたぬなご。shan po 今古の意義は、たぬ、その命名が意義をのこしたものである。註 36 参照。

(28) lHa rigs hphan po che rLans. LPS. ff. 4b, 10b, 15a, 15b; lHa rigs rLans. ibid. ff. 15a, 16b, 17a, 18a, 20b.

(29) Shan po sGo 今古の命名法は、素朗谷 sBran Kho 今古の rGyal mo roñ 女士司の氏名のあけ方と同じ。 「Shan po」は「父」の sGo を持つもの」と解される。

(30) Se Khyuñ hBras を Se Khyuñ Rva と讀んだら、Se, Khyuñ, Rva の三語族が、Kham 東方といふ、互に語を綴じてつたといふことが出来る。Khyuñ po 今古の sGo には、「蘇毗」五四―五六頁、註 31 を、Khyuñ po と Rva と同じく、同五七、五八頁を、三者の關係は

については同五八頁を参照。

- (31) Rva という形で考える場合、Rva は、この地方と何か関係があつたらしく、地名では同徳の Rva rga があり、大金川河に注ぐ Rva chu (註91参照) があつた。また、Bran 氏から輩出したものと Rva rgan と称する一族がある(第四章と註90参照)。たとえば、Kho が元来、Don 部族に属してゐた場合(本文九頁参照)、Don は Rva skad を語じたところ(DG. I. f. 277b)から、両者との関係が生ずるわけがある。また、sBran 氏が、Khams に行ったとき既に Rva と関係を結んでゐたことを考へられる。

(32) LPS. pp. 5a-b.

- (33) すべてを三から成る数でまとめる。たとえば、stod, bar, smad; dkar, khra, nag などの風で、夫々三が必要となる。無理に図式化して九の数でまとめたもので、他意はなへ、よへある例の一である。

(34) LPS. pp. 5a. Kho yo la khri tsho bcu gñis yod de/ Kho spro la hbum tsho bco brgyad yod/

(35) rLans po ti bse ru yā' i 聚' Se Khyun hbras (dBra/Ra) 又書はなるの' Se khyun Ara 又書はなる。本體は「語のなる語の rLans 又 sBran 又の聚の聚の係りをもつる」Po ti bse ru yā' sBran 又は、完全く現れなご。筆者は、よへないの位置に現れる Ara 又

大胆に sBra (h) の誤写と見なしてゐる。試みに Ara 又 sBran) の価値と読み直して見ると、Po ti bse ru 又 sBra を彼等の部族的起源に関わるものと考えようといふ(LPS. p. 5a) がわかるのである。

- (36) 「白は、白馬、参狼(=白蘭)、蒼牛(=白狼)に共通して崇まわれてゐたらしく、この章の終りに示される支那族に関する伝承によつても知られる。この他に、蒼牛種(麂)の多い越嶲方面で、白夷、白獐、白蛮の呼称が清朝時代に行われてゐる。恐らく、関係があるのであらう。「白蘭」註12、註8参照。本論註57, 138参照。

(37) GSR. 108-d 参照。

(38) 狗と同音である。GSR. 108-h 参照。

(39) GSR. 883-1 参照。

(40) 註23参照。

(41) 新唐書、卷三十一、西域伝第項の条。

(42) LPS. p. 52b: rLans dan iHā gzig shes pa yan/dGra yi gduñ la mshan btags yin dGra stras rLans yin/rLans stras la iHā gzig dan ni sñan thog dan/gSer; gYu, Ru dpon, Grags ngo ba/...la sogs rus phran ni/min btags qin tu man bahi phyrir/gduñ rus byas kyan hgal rgyu med/

(43) dGra 又 dBra のチヤン文字は、頗る誤字のれきす

い。sBra は sBra の異態字である。sBra が sBrān の訛つた写し方であることは、本文で見るとおりである。

(44) Hlans po u bse ru の説明でもかゝらうが、一般には母方の氏名を子供のそれに持ち出すことはあまりない。

或いは母方の氏名を、或いは父方の氏名を、時には二つを連ねて示すということは、母方の氏名がその氏族にとつて重きをなしたために名乗られたのであつて、たとえ、名字代りに用いられたにしても、そのような起源に由来する習慣と見なければならぬであらう。

(45) 近代の Tsha kho は、すべて血縁的に Hlans 氏に内属するものとみなして、一般の Tsha kho、特に古く時代のもものは、むしろ、単なる従属関係であつたとしておこなう方が穩當であらう。しかして Varocana の弟十「gYu sgra sin po」の Tsha kho をあげた。(註26参照) ところが場合、この Tsha kho をあげた Kho hphan はあつたと取れば、Hha rigs sGo の登場以前に既に他の系統の(一四頁参照) Hlans 氏に内属した sGo があつたと云えるかも知れない。註27参照。

(46) 松潘県志、卷三边防、附録湯興順上川督路乘璋恢復松潘四条(獐猓子についての条を外して再録する。)

松潘鎮屬各營所管番夷地方遼瀾人有四種 話有二四類、  
1、松中所屬牟尼、毛革、拈佑、熱霧、漳臘屬三寨一類

話係吐蕃一種。

3、松中屬九關東壩、腊枚大寨、竜安屬果子壩、黃羊關、白馬路、火溪溝、松左漳臘、南坪屬上中下羊崗、和約、後山界連甘肅、楊布等二処一類之話係氏羌一種。

4、漳臘屬口外三十七部落一類之話係西戎一種而字同音不同。

Liu En-lan 氏は Old Fan, New Fan, Ch'iang, Gia rung と分けて、それらの分布状態を示してゐる。中心は雜谷に近い理蕃庁である。TLC. pp. 3—4 に on 次のものである。

northeast: Old Fan, New Fan, San Ts'i Fan  
[=Ch'iang]

east of Wu-t'un (五屯) and north of the  
Cha ku River (雜谷河) [=九姑] } ...Ch'iang  
east of Wu-t'un and south of the Cha  
ku River [=十寨] }

south east: .....Ch'iang  
(Wa-t'un and) the mountainous country  
along the lower stretch of the So mo  
River (梭磨河) [=四土]

beyond the mountainous districts, from

Ma'tang (馬塘) to Sung-kang (松岡) } ...Fan  
 in the grasslands of the tablelands

西田竜雄氏が「十六世紀における西康省チベット語天全方言について」(京都大学文学部紀要、第七、昭三三)のうちに触れている(九二、九三頁)「松潘属象鼻高山西番訳語」は、香啗 Shan tsha'、八頓 Ped sten'、高子莊、Shan tshan 地区で行われた、Liu 氏のいう Old Fan の言語であろう。「恢復松潘四條」第四に相当するのであろうか。

また、「松潘属瓦沃雜校大小金川各西番訳語」の方は、瓦寺 Wa si'、沃日 Ha gshi'、雜谷 Tsha kho'、梭磨 So man、大小金川 Rab bran, bTsan lha の方言を収めたもので、獐獐子の言語を扱ったものである。これらの地域については註48参照。

(47) 四川通志、卷九十六武備土司(一)では獐夷種類といひ、松潘県志、卷四土司では、獐獐種と類別している。これらの土司の拠る地域は、「恢復松潘四條」の獐獐子の領域に殆んど含まれている。

(48) 獐獐子の言語領域のうちに、「松潘瓦沃雜校大小金川各西番訳語」に含まれる瓦沃大小金川の四が含まれていない。この四は雜谷庁または理番庁の所轄であつたから対象から外されていたのかも知れない。

雜谷の五屯は直隸理番庁志、卷一輿地疆域によると、轄屯五、曰雜谷腦砦、曰乾堡砦、曰上孟董砦、曰下孟董砦、曰九子屯砦、

とあり、註7でいう Tsha ba roh 地域に当る。他方、四土の方は、音写の仕方と対応するチベット語の表記を並べると次のようになる。

四川通志	理番庁志	DzG	DG III
俊磨	梭磨	So man	So man
卓克基	卓克米	ICog rise	Cog rise
松岡	從鳴克從巖(克)	rDzoin hga	rDzin hga
党壩	丹壩	Dam pa	—

右に維斯甲(布) Khro skyabs'、革(布) 什啗 dGe shi rtsa (dGe bges tsa)、田旺 Ba bam'、田地(布拉克底) Bra si'、沃克汁(沃日、鄂克什) Ha gshi' を併せて九土司という(平定両金川述略)。(但し、「蜀徼紀聞」では、小金川、瓦寺をこれに加えている。) hDam giñ rgyas bçad によると、「昔は十八王国あつたが、今は十三程しかない。」とある(DzG. f. 77a)その十三は、右の九つに瓦寺 Wa si'、價拉(小金川) bTsan la (bTsan lha)、促侵(大金川) Chu chen (= Rab bran)、丹田 bsTan pa を加えたものであ

らう。その他に示された mDo Ji, Hwa hwa, Len Isa, rGyal kha, mGron bu などについては詳細は不明である。また、*ICag la* などについては GTD, pp.184—185 参照。

(49) 松藩県志附图に示されている位置である。

(50) 四川通志、卷九十六武備、土司(一)による。括弧内は松藩県志、卷四土司による。乾隆 四川通志、卷十九土司には四土の西側に続く緯斯甲 Khro skyabs の安撫司として、やはり索浪の名を挙げている。

(51) 卓克基 Cog tse の「チャット」資料では女士司である。DG, III, f. 263a ㊦ Cog rtselhi b'lag mo Tshe rin lha mo とあることが知られる。

(52) 氏名を表わすのに「谷」を用いた例である。この場合「谷」(現代音 *ku*) をよって写されたものは rGo/sGo/ mGo/hGo である。「索朗」谷は sBran sGo をいう以外に考えられなからである。「谷」が Tsha kho の Khno も写せば IHa rigs sGo の sGo も写すことを示している例もある。

(53) 索朗、索郎、索浪は、それぞれ *so-lung* の、率浪は索郎の誤写かと思われる。sBran の対音としては、字朗、字郎、字浪 *po-lang* の方がよく、「寺院総攬補」では sBra と一般に示すが、So man 王家の氏名のいわれを述べたと

ころでは正しく sBran と示している。第四章参照。

(54) 註 42、註 43 参照。

(55) 註 7、註 16 参照。註 7 で示す Tsha ba ron の方は、本文で後に見る sGo の本拠的な範圍に当らう。

(56) TIC, pp. 4—5 理番の国と云うのは雜合をいう。

(57) 明史、卷三百一十一 四川土司一の茂州衛の条下に

正徳二年(1507)太監羅籛奏、茂州所轄下南村曲山当寨之為白人、願納糧差、其俗以白為善、以黑為惡、礼部覆番人向化、宜令入貢、給賞從之。十四年(1510)巡撫馬昊調松藩兵攻小東路番寨、而茂州核桃溝上下関番蛮懼遂納白石、羅打鼓、諸寨生番攻围城堡、游擊張傑敗績。とあり、松藩県志、卷五檀廟に白馬廟と云うて

南門外相伝、明憲宗時、白馬路水土茹兒等聚番衆滋擾、居民苦之。衛指揮同知堯曠充參將、与二兵使沈琮、率兵分剿。或毎次作戰、多選白馬、為先鋒、夷人見白馬、即退、大克之、民賴以安。後立詞、或呼為白馬將軍。

と云う。右の場合、「白」特に白馬に対する畏れを利用して戦を有利に導いたものである。rLans po ti bse ru には、rLans 氏の祖 Man Idon stag btsan が、神のこかわした sMan btsun ma と会うとき、前者が「身体に白絹の衣をまとい、頭に玻璃のように白い鉢巻きを締め、」(T.P.S. p.6b)「白くも美しい乙女が、身に白絹をまとい、頭を金や

碧玉などの玉で飾りつて」(LPS. p. 7a) 現われるのを見ることとする。Man Idon stag bisan が出陣するのを「本清淨の白馬『緑玉の鬣』にまたがり、かの水晶白の曹を頂か、かの銀白の鎧をかぶり、かの白米耀の武器を携え」(LPS. p. 7b) とおしつゝ、やむり出すべしとある。Man Idon stag bisan が神性を現わすことか、「白馬に跨る白人」(LPS. p. 8b—9a) と化することも知られてくる。これらを本文中の記述と併せて見れば興味深き。

(85) 註46参照。

(86) 註6参照。なほ、Sehu と完瑣との關係をいふては「蘇賦」註138参照。彼等を Chiang とみなし註49参照。

(87) DGI. f. 279a. Tog tsha/rMog tsha/mGo tsha/sPu tsha/rKan tsha sog's tsha chen boo brygad du grags pa yañ Doñ yin no/

(88) チベット語の cha/tsha/rtsa は分付前(母方の)系統筋などの意味がある。dGe bces tsa など tsa を揚合で用いた、rtsa など tsha とも書かれる。一般にこれらの命名は特に古いと考えられるから、チベット語で理解してよいように思われる。

(89) 「蘇賦」一九一〇頁参照。DzG. f. 77a にせ、Gohn tsha などがあるが、附近に住牧する Beri, Rog gus (g'u) など Doñ 部族に属するもの(DG.I. f. 277b) mGo tsha の異

な写し方と見てよいだろう。「Gohn」という写し方は「狗」*kau* や、後で見ると「高」*kau* などと同じ示されるものに近い感じである。

(90) sGo Idon など同じの考案は、TAM. pp. 40—41 に見られる。道半と打簡牘の間にある鞍轡は、一名を Go ta と地図(「中図」)で示されている。その位置から見て sGo sdon を示すものとみなしてよいであらう。

(91) 第二章のはじめの引用文(四頁)参照。

(92) LPS. p. 12b

(93) LPS. p. 13b

(94) Rehu mig (dPag bsam ljon bzam); Deb ther snon po, Na, 77a—b.

(95) LPS. pp. 22a—30b. 30b にせ、gSer pa Dar ma bzam po に「(註)に理解し感う gsan snags gsar rin gi chos kyi stin por bkol bahi chos」を授けたことのある、時を知らずたごなる唯一の記事がある。それは、Byan chub hdre bkol に、phyi dar を扱った gsan snags gsar ma など通じていたことであるから、生存期は十世紀末以後とみなされるべきであらう。

(96) sGor tse の sGo といふた、tse の現存は、たえず sGo の母音 o に附着した r とある。tse を tje とな同義とあることと同じな「蘇賦」註22参照。

- (70) *Iha rigs* sGo と同じ場合、*Iha rigs* は sGo の修飾語であつて、*Iha grigs* rLans と同じ場合と構成が異なる。*Iha rigs* は rLans 氏をさうが、sGo を対立するものでなく、由らに属するものとして示す。rigs (部族) と同じ語を伴つてゐる点も他の表わし方とは異つてゐる。用例と同じには、註を参照。
- (71) *Iha grigs* mDo pahī rgyud (LPS. p. 13a) と *mDo* khams kyī rLans (LPS. p. 146) と *glān* Khams の *glān* 地方(蘇軾三〇—三二頁参照)に勢力を扶植した *Byān chub* *hdre* *dkol* の系統を中心として命名されてゐる。この系統は、Phag mo gru pa 王朝を成たかたの *Po ti* bse ru 王統をさしてはゐるであらう。
- (72) *gSer* pa, *Ru* dpon, *gYu* pa の系統は、rTse *ñhon* che の系統 (LPS. p. 12a) と、sTon thog (lho) の系統 *ñpo* mDo smad *gYar* mo than の rLans 氏であらう。ついで、本家とすべからざる。本文二八頁参照。
- (73) 註を参照。sGo rTse pa とは「sGo rTse に属するもの」の意味であらう。
- (74) 龍安は府名、松藩は茂州の東側とある。今日の四川平武県方面に当る。
- (75) 本文三三頁参照。
- (76) LPS. p. 13b: sGo la sgo go ni/sGor rTsehi mes pho yin/
- (77) 例えば、Tsha ba ron の *Kho* とか、戈または裸、獐とさう呼び方の場合がその例である。
- (78) 毛革の土司の「率浪」の場合には、獐夷種と西番種の境界線上の土司名もあり、記述に不明確な点もあるので除いて考えた。
- (79) DG. III. f. 263a: *Cog tse bdag mo* とあり、女士司とあることを明示してゐる。
- (80) 本文中に述べらるゝ「率浪」の「素浪」は獐夷種とあるから、父系は、やはり、rLans 氏に属する sGo とあり、た新であらう。
- (81) DG. III. f. 259a: *rgyal sa gyi* gtsō bo So man nor buhi *glin* du *rgyal* rgyud bar ma chad par byun ba las skabs *çig* sras gsun *rgyal* srid la (259a/b) ma *ñshams* par rus *giogs* *çig* la *rgyal* sa sBran ces *grags*/
- (82) sBran とは *ñbran* 「宛へ」の他動詞形と相対する。
- (83) DG. III. f. 259b *sKra* dkar *sgrol* mar *grags* pa *rgyal* mo sGrol ma mtshohi dus rGya dan *Chu* chen *ñkhrugs*/de skabs chab *ñhans* nrams *sdod* tshugs pas goñ nas lūn las kyī *bdag* rkyen snar ma *grags* pa lla bu gnani/dehi ries su *rgyal* mo bSod nams *sgrol* mas bskyan/rgyal mo *ñdi* gñis kyī rñ la *ñhañ* than çin tu



dar bas dBal gul Khro kho mGo log tshun la dbar  
bsgyur/

(84) 「聖武記」の乾隆平定金川土司記によると、乾隆三十六年、小金川の澤旺の子、僧桑格は鄂克什を攻めたため、清軍と衝突した。元來、清軍の出兵は、大金川に攻められた小金川を救うためのものであったが、清朝側では小金川をこらしめる軍をおこし、雲南から温福をまわし、桂林を總督にして小金川を攻めた。その時僧桑格は、大金川に領地を割く約束をして援を求め、大金川の索諾木はひそかに僧桑格を助けた。三十七年春、桂林は革布什札の土地を小金川から解放し、温福も、資里と阿喀を奪回した。この間のこととして王昶「蜀徼紀聞」(小方壺齋輿地叢鈔第八帙)の三十七年正月二十三日の条に、「三雜谷各願出兵会勦小金川」とあり、説明の文をはさんで、「三雜谷中梭磨女士司卓爾瑪為長知恭順」とも加えている。小金川の掃討作戦について、三雜谷(卓克基、松岡、梭磨)は清朝側に協力を申し出ており、その主唱者は梭磨の卓爾瑪であったというのである。この時の大小金川については、本文第五章 Rab brtan, bTsan lha の部分参照。

(85) 四川通志、卷九十六武備、土司(嘉慶)には、俊磨だけ、宣慰使司女士司索浪卓瑪とあつて、他の長官司、宣慰司、安撫司、宣撫司と別扱いになつてゐる。

(86) 卓瑪が女士司になつた経緯は四川通志(嘉慶)、卷九十六武備、土司には「嘉慶三年土司斯丹巴病故、無子、嫡妻索浪卓瑪為土舍頭人夷衆鄰封所服、總督勅保奏准以索浪卓瑪承襲梭磨宣慰土司之職、嘉慶六年換領号紙」とあり、夫の死後子が無くて、やむなく職をついだことになつてゐる。おもうに、清朝では土司は男子ときめていたからこのような解釈をとつたのであろう。松岡長官司女士司索朗谷色爾滿が出来るのにも同じ理由が示されて「嘉慶五年土司納木耳病故、無子、報請以伊妻索朗谷色爾滿領給号紙」となつてゐる。これらは、夫に委ねてあつた酋長としての権限を、夫の死後自分の手に取り戻し、それによつて女士司たることの承認を求めたもので、実は、*Cham* 氏の本来の体制に違つたのである。理番庁志、卷四辺防夷俗の章の雜谷、梭磨諸番について述べるところによると、「酋長承襲、即妻其所承之人之妻、納後母娶養嫂二不以為非」とあつて、後段はチベット一般の習慣であるが、前段は酋長としての権限が前任者の妻女を娶ること發生すると明している。これによつても、元來、酋長の権限が女性によつて相続され、名目が夫に委託されていた事実を察知できよう。子供が生れるまで母方の家で一切の責任を負うという習慣があつたのも、このような女子による権限の相続がある場合当然であらう。子供が生れるとはじめて父系統制の

社会がこれほど活動をかぎつたのであらう。理藩庁志(同前)が「酋長娶婦、蕃民男女皆酌、酒相資、婦未生、子女歛、食男女皆給、十母家、雖千里之外、必至、有所出、然後衣、食、十夫、」とつづけるのは右のやうな情況を反映してゐる。

- (59) DG. III. f. 259b: Rab brtan gyi rgyud nas chad zer ba dan/yan *Bod chos rgyal gyi galuñ rgyud* shing dai por So mañ rgyal khab tu bshugs pa rgyal po T'she mgon legs pa/de nas mi rabs mañ du soñ skabs rgyal po sTsa ban thar la sras gsum yod pa las so sor gyas kyañ zer/

- (60) DG. III. f. 259a<sup>r</sup> 本文一ノ頁 註五參照。  
(61) Bod chos rgyal gyi rgyud 彗' 彗'のニニ體'シ' Sron btsan sgam po, Khri sron lde btsan, Khri grtsug lde btsan 等公衆を保護した朝土を田した家屋の體'ニ' 土權を撰つてゐる。だゝそれ'ニ' lHa rgya ri ba の田道'に' して'ス'ト'ニ' して'五'田'の'世'を'體' (SG-T. f. 105b) に'彗'彗'の'ニ'を'示'して'ら'る'。"de yan *Bod chos rgyal gyi galuñ rgyud* dri ma med pa, gNam lde hod srubñ kyi sras....."

(62) DG. III. 260a: Khu hjöhi rigs yin la/sBra (sBran) dan dön gcig/snar Khams phyogs su sBra rje dpon gyi rigs hgah yod pa las rDo rol khañ drug dan/lHa ngo

sten sog's su sBra klu bsher nag po dpon pohi skabs

yul nän byun bas klu bsher pha bu T'sha roh du honi/s T'sha rgyal la ngo btags pas klu bsher blon por bskos/ blon po sBra rgan du thogs pa zur chags pas Rva rgan zer/.

- (63) rDo rol 彗'彗'を'體' (一ノ二ニ) 參照。  
(64) 四ノ二體' 彗'九十六'之'體' 十'體'。彗'體'或'彗' 彗'四' 彗'。  
(65) DG. III. 260a—b: yan klu bsher laags mo khri dpon dan ma hchams par yul bud/bTsan lhahi sa Sum mdor re shig bsdad/

(66) DG. III. 260a. rgyal po 'Na çisi bKra çis hbum yul lha Kha ba rta hdra mchod du phyin/lam du bKra çis dün mtsho zer bahi mtsho cuñ la grod pa hdra ba shes hphyas pas mtsho bdag khros/thog phab pas yul gshis mkhar beas rjes med byas/de nas So mañ du hön/s/ rgyal pos blon por bskos/...../Khu hjöhi lun par gshi bzun bas Khu hjö gon hóg Rva rgan dan beas pa byun/

(67) DG. III. 260b: gon smos rgyal srid la ma hcham bahi rgyal bu gsum gyi rgyud yin kyañ zer/gah hār rgyal blon rus gcig par snañ shñh/

(96) 本文四頁参照。

(97) 本文五頁参照。

(98) 上の Shan po を Shan rgyal の Shan と共に Shan shun を縮めた意味で扱ったことゆいかも知れない。Shan po は Shan shun の起源をめぐって考えられるからである。しかし、shan po は普通名詞として「母方の叔伯父」(考異「九一一頁参照)の意を示す重要な語であり、前者の用法は他に確認されていない。従って、普通名詞としての意味を尊重し、用法を考慮に入れるなら、或る部族の異名として歴史的な資格を表明しているものと取り扱われるを得ない。従来の見解は shan po を sGo の修飾詞として扱った (TAM, pp. 19, 40, 70 参照) が、それでは「初期には Shan po 後期には IHa rigs sGo が挙げられる」(本文一一一頁 DG, III, f. 258b 参照) の解釈がいかんなくなるわけである。註に参照。

(99) 本文四頁参照。

(100) TIG, p. 10. 同様の相違は、言語の面でも観察される。EJR, p. 212.

(101) 註 48 参照。

(102) 李心衡「金川瑣記」は小方壺齋輿地叢鈔第八帙に収められている。

(103) DG, III, f. 266b

(97) DG, III, f. 265b: Rab brtan gyi rgyal sa Bon gyi gnas chen du grags gin/.../Bon gyi mshan hid yod pahü dgon chen g-Yun druñ lha sten gon gi bkas dGe lugs su bsgyur/

(99) bsTan pa は屢々 Dam pa と誤られる。これは丹巴、丹壩を示されるからである。区別した漢字で写される場合、Dam pa は概ね党壩となつてゐる。党壩は四十の西端を成すが、bsTan pa は Rab brtan の南にある hDzam glin rgyas bpad とは異なる。GTD, p. 185, n. 650 の Damba ts bsTan pa とは、n. 642 の Damba ts Dam pa とは、「丹巴」は丹巴の南と異なる。bsTan pa とは異なる。

(101) DG, III, f. 265b: Chu chen rin nos su bsTan pa/Rab brtan/bTsan lha nams kyi rgyal sa yod la/phyi ma hiñ gnis stobs dan dpah rtsal che bas Hor rgyal pohi dus nas mñah shabs su ma chug par grags/gon ma Chen luñ gi dus dmag dpon A can jun dmag dan bcas pas lo bcu gnis kyi rin hñhab nas mñah hog tu bcug/

(107) 註 106 に述べられた史実に対応する報告は、平定両金川 述略(陽湖趙翼著)「小方壺齋輿地叢鈔」第八帙)や聖武記 卷七、乾隆初定金川土司記と乾隆平定金川土司記に見える。

特に乾隆二十三(一七五八)年以後が取り上げられてくる。  
A can jun としうのは最終段階で参贊大臣でなつた阿桂  
のことであらう。

(10) 註28参照。

(10) 巴底は巴地(GTD)´ 巴拉克底(金川雜記)´ 布拉克底  
(平定兩金川述略)と写れ、チヤンと側びな Bra sti と  
綴られるのを見なが Brag sde が対応する字であらう。位  
置で同じのはなは GTD. p. 185, n. 645 参照。

(11) GTD. p. 185, n. 646 参照。巴底は近ごろの  
「中圖」では巴底(巴田)(Dam pa)の圖であらう。

(11) 註10と11参照。

(12) 東女国における白河の地位はこのあと本文で見られ  
る。また、金川が Gyim god の対音であらう。S Bran 氏の  
所拠を示す名は、この本第1章で考察した。

(13) DG. I. f. 275b: ([Phag thar] kho ran la bu bshi  
yod pañi goig Kha thog pa bla ma Chos hbum yin/che  
ba rDo rje hbum la rDo rol gyi sa cha mi sde/hbrin  
po Padma hbum la hDzi rkahi khog/chun ba Padma  
yag la sMar rol gyi sa cha dan mi sde byin/rÑa khog  
gi mi sde/gSer khog gi khral/gYu dan rTsan khog gi  
sa cha mi sde rnam thun moñ du bshag/(Phyag dar  
が明の宣宗から敍任をうけたことと引用文の直前に示され

りし)

(11) rDo chu, sMar chu としうは註16参照。

(11) 今回の圖では「中圖」の通りであらう。rDo khog,  
sMar khog, hDzi khog, (=hDzi rkahi khog) としうは  
4 DzG. f. 77b と sTön skor の東に rDo khog, hDzi  
khog, sMar khog としうの圖(lun pa)があらう。と  
し「sMar khog 4 mGo log 父母の地であらう」と示し  
てしう。

(11) rÑa khog としうは DzG. f. 78a と「やの(mDzod  
dge stod ma) 措じ、rGya roñ の地は成へ rÑa khog sde  
ha pa の國なあらう、うはまた國は大であらう、人は少なう。」  
とあらうしう。rÑa khog sde ha pa は rÑa khog sde  
rña pa の異體字で、rÑa gul と rÑa pa を合せてしうと考  
へてあらう。sde ha pa は Wylie 氏の rñe じ「汗  
跡をあらう」と訳す理由は確かならう。GTD. p.  
105, p. 105, p. 190, n. 696´ Na çsi としうは註1参照。

(11) 「白蘭」二八一—三三頁参照。

(11) LPS. p. 53a

(11) DG. III. f. 245b. rÑa ñin dMehi sar Kha çì ri khrod  
bKra çis dge hphel gliñ/ rÑa ñin 6 ñin 4 mDzod dge  
ñin ma 6 ñin 4 ñin nos 6 善來を南側を措ちるかに  
思はれらう。

(20) gSer po かな sBran せうちんマ語の世称びあなり  
とびらうし第1章びへむじへ見ゆ。

(21) rLans 々 Gyim god ぶらうしせ「白蘭」二二—二五  
頁参照。

(22) LPS, p. 12a. なぎ' g-Yu pa なかかむらやめり' g-Yu  
khog せ rDo, hDzi, sMar khog の下とあひ' rDo chu  
の順のあひ g-Yu rise せあひの親族びあひ。

(23) 仏教系のカンマノハヤ Aryarakṣadeva, Sugata  
(go cha) せうちんマ語の dPal ldan, dPal gyi sen ge,  
mchog gi bla ma せうち。古藤千鶴の権田圃のせうち'  
Khri gñan lha khri, rGyal gzigs ldans lha, Khri sgra  
stag tshab, sTag ra rgyal hgon, rGyal gzigs ran klu,  
rGyal btsan klu bsher せうち' 二〇〇の親成親は Khri  
gsum rie dpal ldan, mChog gi bla ma sTag zans rgyal  
ldan びあひ。

(24) KGT, f. 123b: 「御配子とある家来スミヌの国から排  
仏主義をなかりしめて後、仏教徒となるよう教化し、十善  
を奉行せしむる目的は、氏の女性 lha ldem 々 shan (sic)  
blon Khri sum brtsags のせうち遣わした。彼女は王命  
びあひスミヌ四万戸を十善に向わしめた。その上、弟子とせ  
bandhye rLans Sugata, dPal gyi sen ge, Ārya (rakṣad-  
eva) なりせあひなせうち' せうちの師とせあひつ優れ、若

識せあひのが多へ' Nan ga mi 々都僧統が口をあかれし  
lha ldem をたたえられたる、優美として家来十二三を  
彼に賜わした。」

但の正用文中の Nan ga mi (go cha) せ TLT, II,  
p. 85 に見え' Ganaraksita の衆十の衆統び bSam yas,  
hPhrul snañ び現れたる善知識とせあひらう。せだ' shañ  
blon Khri sum brtsags せあひらう' Khri lde sroñ btsan  
々 dKar chun を建したるあの詔教と轉譯した lRan blon  
Khri sum rie speg lha びあひら( sBran 氏を母方とせあひ  
ら shan blon?) 二〇〇の詔教(TTK, pp. 100—104, KGT, f.  
128b—130b) 二せ' Sugata go cha の衆 bSer ba bSam  
skyes 二配子とあるせ rLan blon bSam skyes のせ  
見せ。せうちせ' 二のせは Khri gsum rie dpal ldan 々  
Khri sum rie speg lha 二配子' せうちな(せうちら  
前)が誤写とせうち名前かと考えられる。詔教は九世紀  
初頭(八一五年迄)に出され、仏教の信奉を群臣に誓わ  
せあひら( TTK, pp. 50—55)。

(25) 「白蘭」一五—一六頁、四七頁、註5参照。

(26) Lan Myes zigs のせは rLans po ti bse ru のうら  
は見出されなう。直系の後裔は滅されて名が伝わらな  
かると見ゆへあかも知れなう。

(27) 註26・45参照。mDo bsher nag po の衆十は dPal bsher

- Bisan pa (Padma bkah than, p. 300) びせん<sup>せ</sup>一人の名では bsher が用いられて特徴となつてゐる。Tsha ba ron は維恭一州の置かれた、古くから白蘭の拠る地であつた。したがつて、rGyal nag の系統の rLams 氏に属していたに違ふない。rGyal nag とどううのはボン教から仏教への転宗に抵抗した「となどを示す異名としてあるのではなからうか。とすれば、mDo bsher nag po の nag po の異名として加わえられたものと解せられる。rLams po ti bse ru と示された世系表 (LPS, p. 11a) には rgyal po Khri hbar ka lun gseb の長子と mDo bsher rin po なるものがあり、その弟達に g-Yu, rMa, Na, Khri を冠して夫々 bsher rin po を稱してゐた。残念ながら mDo bsher rin po の子孫の名は見えてゐない。時代は八・九世紀の境頃に推定されてよい。特に Vairocana がこの地に赴むいた目的がボン教徒教化だつたと解すれば、この推測はあながち不当ではないと思われぬ。
- (128) *piên*: GSR, no. 389-a; *dz'ieu*: ibid, no. 1093-a. なお、後者の対音 *shelhu* は che (大)rise (頂)rie (主)などと同根で、「王」の意に用いられた古語である。くわしくは「白蘭」二二頁、四三頁、註62参照。
- (129) *kau*: GSR, no. 1129-a; *pi'ak*: ibid, no. 772-a (130) 九一〇頁参照。
- (131) *suo*: GSR, no. 67-c; *bi'ieuv*: ibid, no. 307-a; *lat*: ibid, no. 272-a; *nuo*: ibid, no. 941.
- (132) 「姑死而婦繼」は権力継承の方式をはつきり示してゐる。「爾雅」の「釈親」に「婦稱丈夫之母曰姑」とある。これで第四章にくわしく見た母権の継承方式が東女国以来のものであることが確認される。
- (133) *k'ang*: GSR, no. 746-h; *ian*: ibid, no. 203-a; *ts'ieuv*: ibid, no. 462-a. 筆者は先づ「康延川」の対音に rKyan chu を擬したことがある(「白蘭」五三頁、註120)が、今訂正しておきたい。これは川の名でなく地名である。
- (134) *kiam*: GSR, no. 652-a. この *kiam* が *k'ang* と *ian* との二字で写られていると解する。
- (136) *Gyin god* と金川については「白蘭」二二―二五頁に説明した。金川が Rab brian と Bisan lha にまたがることについては第五章のはじめ(二四頁)に明らかにした。
- (136) 四川通志、卷九十六、武備、土司によつて土司の所拠を数えるところなる。
- (137) 党項には有力な氏族として細封氏があつた。これを *Sehu* の対音とみなし、後者が蘇によつて写されるとするのが筆者の意見である。「蘇毗」二八―二九頁(但し左封を除く)参照。
- (138) 羅女蛮は Lo nag の対音に違ふない。nag が黒 nag

の意味をもつ(西田竜雄、「西夏文字」、東京 一九六七、一五頁参照)とすれば、羅女は「黒い羅」であろう。羅は羅羅 Lo lo (Kla Ivo) または猓羅 (Don 九頁参照) のこと、黒白二種あり、「黒い羅」はそのうちの黒夷、黒猓羅、烏蛮と呼ばれるものに当る。猓羅は KLa Ivo に Don が複合したもので、その一部を古くは嘉良夷とも云つた。尤も、近代では Lo lo を Ga ro 種とチャットでは呼んでゐる (DzG. f. 75b) Ga ro は中国音を逆に写して出来た称であるうか。他方、白夷、白猓、白蛮といわれるのが、いわゆる Mossou、<sup>1)</sup> 麼麼、麼麼と写される。麼麼はチャット語の mDzo 「犛牛」の対音で、犛牛種、越禰羌を呼ぶ名であり、白馬、參狼 (hBal, rIans) と共に無弋爰劍の末裔とされる(後漢書、八七 西羌伝)。チャットは mDzo Sum pa と彼等を一ひとまとめて呼ぶ (DTF. p. 111)。Sum pa を代表する rIans 氏(白蘭=參狼)が白馬と牝の mDzo を祖とすることも三者の関係を象徴しているようである。麼麼のうち馬、郎の二氏が認められ、白路、虛郎の地名が彼等の住地の名に見られる。いずれも hBal, rIans の対音と考えられてよいであろう。彼等は今日では Sum pa の南に遠く離れているが、古くはすく南にもあつて、そのうちの郎氏が參狼の rIans 氏と区別されて白狼と呼ばれたのではないかと思われる。

東女国と白蘭 山口

(139) Khri sion bssan 代にも帰順していたと見えて、王の死後離反したものとつて mDzo Sum pa の名が示される (DTF. p. 111)。なほ Myan とよめ Sum pa の制庄に關しては「白蘭」一四一—一五頁参照。

(140) 於是進兵、攻破竟項及白蘭諸羌、率其衆二十余万、頓於松州西境、遣使貢金帛云、來迎公主。(旧唐書卷一九六上、吐蕃伝) 時に貞觀十二年のことであつた。

(141) 「白蘭」六一—七頁、同四四頁註42参照。

(142) 冊府元龜、九九五 交侵 吐蕃の唐突な白蘭攻撃は本論のような解釈によらない限り、理解しがたい。

吐蕃の攻撃を予知してか通鑑(唐紀十五)によると、(顯慶元年) 冬十一月丙寅、生羌酋長浪我利波等帥衆内附、以其地置拓柁二州(柘州蓬山郡、柁州鉢南浪恐部置、皆屬松州都督府……)

とある。この浪は勿論 rIans 氏を示すが、柘州の位置が、維恭二州の中間を東寄りに見たところに求められるから、雑谷東部に拠つていたものである。金川方面を支配した rIans 氏と同じ hPhan po rIans に属していたと思われる。

(143) 新唐書にあるのは蘇伐刺擊羅囉であるが、後半の羅囉は goṭa の対音で「氏」をいう。西域記に云うとおりをもつてきたのは、sBran のチャット音を写したというよ

り、Sbran の原字としての suvarna を知つた上でか或は、Sbran の音と共に意もまた「唐言金氏」であると知つたからかのいずれかであろう。

(144) 松田寿男「女国についての考」(池内博士還暦記念東洋史論叢、東京、昭和十五年)七九九頁参照。佐藤長「古代チベット史研究」上、京都、昭和三十三年、二二八頁参照。

(145) 註143参照。

(146) 註134参照。

(147) チベット語は一般に単音節語化の傾向をもち、例え *pha na/phan* 「向ふ」 *ya ru/yar* 「上」 *phu nu/phuun/spun* 「兄弟」<sup>1)</sup> などがそうである。梵語の *brahmana* が *bram ze* の *bram* に縮められるの一例である。 *suva-runa* は *sbarana* から *sbrana/sbran* になつたのであろう。

(148) 本文二七頁、註117参照。 *gSer po* は雪児トの対音であり、*gSer khog* や領主名 *gSer pa*, *gSer hdzin* を通じて *gSer* の「人」の意が込められてゐる。

(149) *khog* は *khag* との間をひなぐ語 *khug/khvag* 「屈曲を避物」からわかるやうに屈を意味する。註13、14参照。

(150) DTH. p. 55 *Phag gi lo* (747) の条では「*Kog yul du Gyahi Byim po byunste*」となつてゐるが、原文では「*Gog yul*」である。 *Bruca* 勃律と共に西方にある國である。これらの國はこの年高仙之によつて吐蕃から奪回

された。 *Byim po* と *Gyim po* はどのよつて結びつくか知らなう。これと対して *Bya gag gi lo* (745) の条であるのは明らかで「*Kog yul* の *rGya* の *Gyim po*」 *rGya* の將軍 *hBah tsan kun* に率ゐられ、吐蕃の二將軍が石堡城 (*Jid par*) をこれをむかへうつてゐる。この *Gyim po* は、開元二十八年唐が安戎城を攻めた時、吐蕃から寢返つた集団を指してゐるのであろう。 *hBah tsan kun* は皇甫維明に當り、「播川公」を写したのであろう。

(151) *Kog yul* とさうのほ、北は *gSan khog*、東は *gSer khog*、南は *Hor khog*、西は *rDo khog* と限られた地域を指したのかと思われる。他に *khog* を伴う地名は *Khams* の *lDan khog*, *Iga khog* の名が見られるはずがない。既に幾度か言及したことであるが、「蘇軾」五四頁、註116、六四頁、註130の、新田唐書覚項伝に見える黒 (*Xak: GSR. no. 904-a*) 覚項に當るの *びやく* の *R.A. Stein* は、敦煌文書 (*Pelliot no. 1082*) を *KGT. (Pa. f. 109a)* とびやくの *Gog* 回と面した *Ma grom* を *mGo log* とする *Ma khrom* と *gSan nyul* と *gSer* (*TAM. p. 30*) の *gSer*、我々の見は *Kog yul* と *Gog (Kog)* 回と流れてゐたことを教えてくれる。ただ、残念ながら *Kog* 河は今日のどの河か不明である。

(152) 本文九頁参照。